

社会開発調査部報告書

国際協力事業団
モンゴルの国インフラ開発省

No. 2

モンゴル国 観光開発計画調査

ファイナルレポート

要約

平成11年7月

JICA LIBRARY



J1151288(6)

株式会社 パテコ
日本工営株式会社

社調一

J R

99-099

JICA
115
75.9
SSE
BRARY



国際協力事業団
モンゴル国インフラ開発省

モンゴル国
観光開発計画調査

ファイナルレポート
要約

平成11年7月

株式会社 パデコ
日本工営株式会社

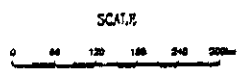
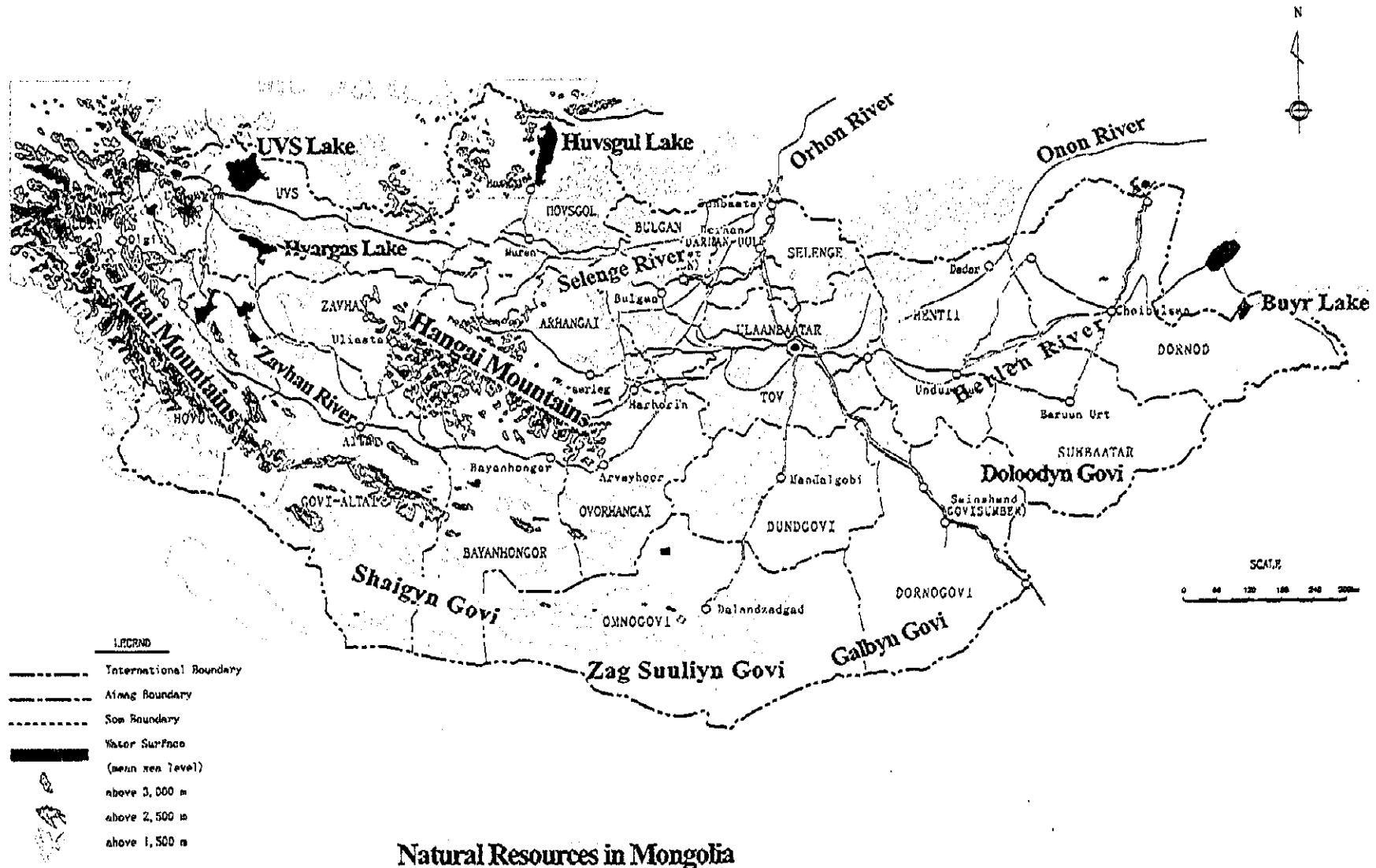
外貨交換レートには以下の為替レート
(1999年5月現在)を採用する

US\$ 1.00 = 870 Tg

US\$ 1.00 = ¥ 115



1151288{6}



序文

日本国政府は、モンゴル国政府の要請に基づき、同国の総合観光開発計画にかかる開発調査を行うことを決定し、国際協力事業団がこの調査を実施致しました。

当事業団は、平成10年3月から平成11年7月までの間、3回にわたり、株式会社パデコの本村雄一郎氏を団長とし、同株式会社パデコ及び、日本工営株式会社から構成される調査団を現地に派遣しました。

また、立教大学教授、石井昭夫氏を委員長とする作業管理委員会を設置し、本調査に関し専門的かつ技術的な見地から検討・審議が行われました。

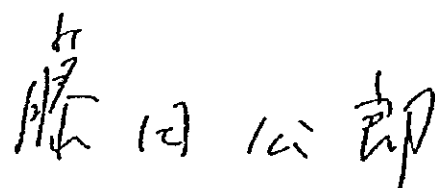
調査団は、モンゴル国政府関係者と協議を行うとともに、計画対象地域における現地調査を実施し、帰国後の国内作業を経て、ここに本報告書完成の運びとなりました。

この報告書が、本計画の推進に寄与するとともに、両国の友好・親善の一層の発展に役立つことを願うものです。

終わりに、調査にご協力ご支援を頂いた関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成11年7月

国際協力事業団
総裁 藤田 公郎

Handwritten signature of Hiroshi Fujita in black ink, written in a cursive style.

1999年7月

国際協力事業団
総裁 藤田 公郎 殿

伝達状

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、ここにモンゴル国観光開発総合計画調査の最終報告書を提出致します。

本報告書は、貴事業団の契約に基づき、1998年3月から1999年7月までの間にかけてモンゴル国において株式会社パデコ及び日本工営株式会社によって共同で実施した調査の結果を取りまとめたものであります。

調査団は、モンゴル国の観光の現状、既存の観光開発方針等を十分に把握した上で、2015年を目標年次とする全国を対象とした観光開発マスタープラン、2015年を目標年次とする優先地域の観光開発計画、及び2005年を目標年次とするアクションプランを策定致しました。

まず、貴事業団及び作業監理委員並びに外務省に心からの感謝を申し上げますと共に、モンゴル国政府関係者、とりわけインフラ開発省によるご厚意、ご協力に深く感謝いたします。また、調査期間中に終始共同作業を遂行していただいたカウンターパートに対して、深く謝意を表す次第です。

最後に、本報告書がモンゴル国の発展に少なからず寄与することを祈念致します。

敬具

団長 本村 雄一郎
モンゴル観光開発総合計画調査共同企業体
株式会社 パデコ
日本工営 株式会社

本村雄一郎

ファイナルレポート（要約版）

結論と提言.....	1
1. 調査の経緯.....	5
1.1 背景.....	5
1.2 報告書の構成.....	6
2. モンゴル観光の現状.....	7
2.1 観光需要.....	7
2.2 観光資源、施設の現況.....	11
2.3 観光行政の現況.....	11
3. 全国の観光開発マスタープラン.....	15
3.1 モンゴル観光開発の基本方針.....	15
3.2 観光需要予測.....	15
3.3 観光地域の開発方針.....	18
3.4 観光開発計画.....	21
3.5 組織・制度の整備.....	22
3.6 インフラ施設整備.....	22
3.7 人材開発.....	23
3.8 環境保全と観光開発.....	24
3.9 観光開発の効果.....	24
4. モデル地域別観光開発マスタープラン.....	26
4.1 ウランバートルの観光開発マスタープラン.....	26
4.2 ハラホリンの観光開発マスタープラン.....	30
4.3 南ゴビの観光開発マスタープラン.....	34
5. 優先プロジェクト・プログラム.....	38
5.1 優先プロジェクト・プログラムの選定.....	38
5.2 優先プロジェクト・プログラムの計画.....	40
6. 優先プロジェクト・プログラムの実施計画.....	54
6.1 実施スケジュール.....	54
6.2 実施担当機関.....	55
6.3 コスト推計.....	56
7. 評価.....	57
7.1 経済評価.....	57
7.2 財務評価.....	57
7.3 初期環境評価.....	58
7.4 環境影響評価.....	59
付属 ステアリング委員会メンバーリスト、他	

略 語 表

AAGR	Average Annual Growth Rate	年平均成長率
ADB	Asian Development Bank	アジア開発銀行
ALS	Average Length of Stay	平均滞在日数
ASTA	American Society of Travel Agents	アメリカ旅行業者協会
BFI	Board of Foreign Investment	海外投資局
BOT	Build Operate Transfer	BOT方式
CATV	Cable TV	ケーブルテレビ
DANIDA	Danish International Development Agency	デンマーク国際開発庁
DOT	Department of Tourism	観光局
FDI	Foreign Direct Investment	海外直接投資
EIA	Environmental Impact Assessment	環境影響評価
ESCAP	Economic and Social Commission for Asia and the Pacific	アジア太平洋経済社会委員会
EU	European Union	欧州共同体
FC	Foreign Currency	外国通貨
GDP	Gross Domestic Products	国内総生産
GNP	Gross National Products	国民総生産
GTZ	Deutsche Gesellschaft fuer Technische Zusammenarbaeit (German Agency for Technical Co-operation)	ドイツ技術協力公社
ICAO	International Civil Aviation Organization	国際民間航空機関
IDD	International Direct Dialing	国際ダイヤル通話
IEE	Initial Environmental Examination	初期環境調査
IMF	International Monetary Fund	国際通貨基金
ITDIJ	International Tourism Development Institute of Japan	国際観光開発研究センター
ITB	International Tourismus-Boerse (Berlin)	ベルリン国際旅行見本市
JICA	Japan International Co-operation Agency	国際協力事業団
JTB	Japan Travel Bureau	日本交通公社
JATA	Japan Association of Travel Agents	日本旅行業協会
JNTO	Japan National Tourist Organization	国際観光振興会
LC	Local Currency	現地通貨
LG	Local Government	現地政府
MIAT	Mongolian Airlines	モンゴル航空
MID	Ministry of Infrastructure Development	インフラ開発省
MNE	Ministry of Nature and Environment	自然環境省
MOTA	Mongolian Organization of Travel Agents	モンゴル旅行業協会
MCCI	Mongolian Chamber of Commerce and Industry	モンゴル商工会議所
MTA	Mongolian Tourism Association	モンゴル観光協会
NTA	National Tourism Agency	モンゴル観光公社
NTAs	National Tourism Administration	国際観光局
NTC	National Tourism Center	モンゴル観光センター
NCP	National Conservation Parks	国立自然保護公園
NGO	Non Government Organization	非政府組織

OM	Operation and Maintenance	維持運営
PA	Protected Area	保護地域
PAA	Protected Area Administration	保護地域管理委員会
PAB	Protected Area Bureau	保護地域管理局
PATA	Pacific Asia Travel Association	太平洋観光協会
SC	Steering Committee	運営委員会
SPA	Strictly Protected Area	特別保護地域
SIT	Special Interest Tour	SIT (特別なテーマ、目的、形態を持った観光旅行)
TACIS	Technical Assistance to the Commonwealth of Independents States	TACIS (旧ソ連諸国向け支援プログラム)
TCIA	Turkish International Cooperation Agency	トルコ国際協力庁
TD	Tourism Department	観光局
TOG	Togrog	トゥグルク
UB	Ulaanbaatar	ウランバートル
UNDP	United Nations Development Program	国連開発計画
WTM	World Travel Market (London)	ワールドトラベルマーケット
WTO	World Tourism Organization	世界観光機構
WWF	World Wide Fund for Nature	世界自然保護基金

要約編

1. 結論と提言

- 1) モンゴル観光は、世界の観光地という観点から見るとネパール、チベット、内モンゴル、等の特化観光市場(SIT)のひとつである。観光需要は、自由市場経済化、複数政党議会体制導入後、急速に増加しているものの、観光を目的とした訪問客でネパールの8分の1(1996年)にも達しておらず小規模な観光地域である。観光サービス、施設水準は未成熟で、世界の観光地域と競争していくには様々な改革、整備が必要である。又、旧コメコン体制からの離脱と計画経済から市場経済へのハードランディングのため弱体化した経済の再生が緊急な課題であり、そのためには外貨獲得産業の育成、強化が必須である。観光産業は外貨獲得の有効な手段であり、旧来の外貨獲得産業である農業、鉱業に加え、観光産業育成の必要性がモンゴル国内でも認知されつつある。
- 2) 世界的な観光地域開発競争の観点からみて評価できるモンゴルの観光資源は、①他に類を見ない土地(草原)と人々(遊牧民の生活・文化)の共生、②損なわれていない自然(草原、砂漠、森林、湖、山岳)であり、さらに③民族の勃興と変遷に伴い残された歴史・遺跡である。これらの観光資源を有効に使い、かつ資源を持続的に保全しながら、観光開発を進めて行かねばならない。
- 3) 一方、モンゴルの観光開発には観光地域整備、観光サービス・施設の向上、組織・制度の整備が不可欠である。歴史・文化観光振興のための整備、国際観光客のゲートウェイであるウランバートル(以下、UBと記す)の観光地・施設整備、ハラホリン、南ゴビの観光施設の充実、観光情報の整備と提供手段の整備、航空旅客サービスの改善、宿泊施設の拡充等が必要である。さらには、自然の保護、歴史遺産の保全といった活動も観光整備の一環として、実施していく必要がある。また、以上の計画を実施するための組織・制度整備として、観光産業の安全性、健全性を担保する許認可制度の整備、観光振興を担う官・民の組織拡充とマーケティング活動、観光産業に従事する人材の教育並びに育成も必要である。
- 4) モンゴル観光の地域的な開発方針は以下の通りとする。短期的(2005年目標)には現在の観光拠点であるUB、ハラホリン、南ゴビの強化とホブスゴムル、ヘチ、ナギ等SIT観光地を開発することによりモンゴル観光の基礎を整備する。中長期的には、上記3拠点の更なるグレードアップと共に、SIT拠点の拡充(ドムコビ、ホブド等)及びその他の観光地域(ドムド、バヤンオゴル、アムナイ等)を開発する。
- 5) モンゴルの観光開発は2015年を目標年次として、以下の事柄を実施することを提案する。

歴史・文化観光の振興

モンゴルの歴史・文化遺跡は全国に散在しており、①現況と歴史的価値把握のための調査、②遺跡の保全、③観光客誘導のための設備、歴史・文化遺跡の解説と休憩施設の整備、④歴史・文化観光のプロモーションが必要である。また遊牧民の生活文化を観光資源として活用することとし、そのための観光施設として遊牧生活の実際、手工芸品の作成・製造等を紹介する博物館、パークセンターを整備する。その際、遊牧民が観光産業へ参画するための仕組み及び制度を整備することで、遊牧民の生活レベルの向上、ひいては文化保全の一助とする。

観光プロダクトの拡充

モンゴル観光のゲートウェイである UB において、都市観光プロダクトを整備することにより、モンゴル観光の魅力を付加する。都心部では観光トレイル、観光プラザを整備し、郊外部では UB 市民や外国人居住者へのサービスも考慮したテーマパーク（民俗パーク、乗馬パーク）の建設を行う。

また、多様な観光活動を導入し、モンゴル観光の魅力を高めるため、熱気球、スポーツ等々のスポーツ観光、列車による観光を振興する。

観光振興組織・制度の整備

- 観光振興のための中央・地方政府組織の整備と、観光ライセンス等の許認可制度の整備・拡充、観光への投資促進、宿泊施設改善のための観光分野への投資インセンティブの整備・拡充。
- サービス向上のための観光産業民間組織の整備。
- 観光客誘致のためのマーケティングの実施。

人材開発

職業訓練、高等教育の拡充が必要であり、特に宿泊施設、飲食産業の管理者と従業員の訓練は緊急の課題である。さらに、自然公園等における自然保護のためのレンジャー、及びガイドの教育・育成。

環境保全と観光開発

持続可能なモンゴルの自然を保護しつつ観光を振興するため、環境管理プログラムを策定することが必要であり、その中には、全国野生生物管理プログラム、エコツーリズム（Nature Oriented Tour）実施プログラム、化石管理プログラム、野鳥観察教育プログラム、自然観光レンジャー及びガイド等の教育・育成と牧地の有効利用に関するプログラム等を含む。

観光サービス・インフラ整備

- 路線、便数、予約・搭乗システムの整備、安全性の確保等の国内航空サービスの改善
- 国際航空料金、宿泊費等の低減によるリーズナブルな観光料金の実現
- UB とハラホリンを結ぶ幹線道路の整備、観光地域内のサービス道路の整備
- ゲルキャンプの施設改善（通信、電気（ソーラー、風力等の導入）、シャワー、トイレ、汚水処理）

その他

- フェスティバルや特別な催しの実施、ツアー料金の割引と積極的なマーケティング活動を行うことで、観光シーズンを現状の7月、8月の2ヶ月から5月から10月までの6ヶ月に観光シーズンを延ばす施策を実施する。
- 国内観光の振興、国民保養のため、市場経済化への移行後荒廃が進んでいる温泉保養所の改善が望まれており、著名温泉療養所の改善、拡充を行う。

6) プライオリティプロジェクトプログラムの実施

モンゴル観光振興を実現するためのプライオリティプロジェクトプログラム（2005年目標）は、以下のものが必要である。

プログラム

<p>1 政府組織強化プログラム A-1 観光庁(NIC)の円滑な運営 A-2 インフラ開発省と観光庁(NIC)による観光行政の強化 A-3 地方観光行政の強化</p>	<p>インフラ開発省内の観光評議会を有効的に運営。 観光局、観光庁(NIC)の強化 県レベルでの観光担当部門強化</p>
<p>2 人的資源開発プログラム A-4 観光人材教育の高度化 A-5 公園管理者等の育成・教育</p>	<p>観光関連人材育成プログラムとして、ICBの強化 コウツスム関連人材の育成、ICBに新設を提案</p>
<p>3 制度整備プログラム A-6 観光投資優遇策整備 A-7 観光開発における土地開発規制策 A-8 観光関連免許制度 A-9 安全基準</p>	<p>観光産業に関する投資インセンティブの新設 観光産業に関する土地利用、開発規制の法整備提案 観光産業の免許制度整備提案 観光産業(乗馬等)の安全基準整備提案</p>
<p>4 各種開発プログラム A-10 モンゴル文化財保全プログラム A-11 ハリリン遺跡群の説明施設整備プログラム A-12 国際航空サービス改善プログラム A-13 国内航空サービス改善プログラム A-14 鉄道観光の強化 A-15 遊牧民の観光産業参加支援プログラム A-16 考古学的遺跡及び野生生物の紹介資料 A-17 モンゴルにおけるコウツスムの手法紹介プログラム A-18 総合環境管理計画作成プログラム A-19 海外観光市場開拓プログラム A-20 UB市ホテル整備指針 A-21 ゲキヤンブ整備指針 A-22 UB市バス(トラバ)の整備プログラム A-23 共通観光券の整備</p>	<p>遺跡、寺院等の保存、改善の促進計画 ハリリンの突蕪、ウイグム遺跡の観光案内施設整備 国際航空サービスの改善 国内航空サービスの改善 鉄道による観光の拡充 遊牧民の観光産業への参加支援方策提案 モンゴルの考古学的遺跡及び野生生物紹介資料 モンゴルにおけるコウツスムの方法を紹介するマニュアル整備 総合環境管理計画作成調査実施の提案 海外観光市場開拓プログラムの提案 UBにおけるホテル整備に関するマニュアル作成提案 ゲキヤンブの整備に関するマニュアル作成提案 バス路線(トラバ)の整備 バス、博物館、土産物などの共通券整備</p>

公的プロジェクト

<p>1 文化観光強化プロジェクト B-1 ホグドフーン博物館の改修 B-2 モンゴル文化博物館の建設 B-3 エキヌス-の改善 B-4 ハリリンビジターセンターの整備</p>	<p>ホグドフーン博物館の改修 モンゴル文化パークの整備 エキヌス-の改善 ハリリンに観光ビジターセンター(博物館)整備</p>
<p>2 UBゲートウェイ開発プロジェクト B-5 UB市内観光トイレの整備 B-6 UB市内観光通りの整備 B-7 ハンドウラフトセンター整備</p>	<p>UB観光トイレの整備 UB観光通りの整備 観光通りに、ハンドウラフトセンターを整備</p>
<p>3 自然型観光強化プロジェクト B-8 リルンブ自然公園の入口にビジターセンター整備 B-9 ゴビビジターセンター整備 B-10 野鳥観察施設整備</p>	<p>リルンブ自然公園の入口にビジターセンター整備 ゴビ渓谷入口にビジターセンター整備 パドウウヤンブ施設をUB、ハリリンに整備</p>
<p>4 その他のプロジェクト B-11 ハリリン観光道路の整備 B-12 UB-ハリリン間国道の交通・観光標識整備 B-13 主要温泉地の施設改善 B-14 民間観光業振興のためのケキヤンブ</p>	<p>ハリリンと突蕪、ウイグム遺跡を結ぶ道路を整備 UB-ハリリン間道路標識の整備 主要温泉の改善 民間観光事業者に対する融資資金の整備</p>

民間プロジェクト

<p>C-1 UB-ハリリン間国道のレストエリア整備 C-2 ゲキヤンブの施設改善 C-3 南ゴビ民間飛行場の施設改善 C-4 乗馬観光の振興 C-5 乗馬パークの整備</p>	<p>UB-ハリリン間でのレストエリアの整備 ゲキヤンブの施設改善案 南ゴビ民間空港の改善提案 新たな乗馬活動導入の提案 馬事公園</p>
--	---

プロジェクト・プログラムのコスト

プライベートプロジェクト・プログラム実施に要する費用は約3,710万ドルで、この内プログラムに1,320万ドル、公共プロジェクトに1,920万ドル、民間プロジェクトに470万ドルが必要である。

7) 整備効果

プライベートプロジェクト・プログラムの実施により、観光需要は2005年に75,000人、2015年210,000人に増加することが予想される。この需要増加による外貨収入は年間2億3,200万ドル(2015年)となり、プライベートプロジェクト・プログラムの投資額との利益率を算定すると、経済的収益率(EIRR)が31.1%である。この値は、モンゴルにおける投資機会費用15%より十分に高い。

プライベートプロジェクト・プログラム内の、航空サービスの改善が行われず、妥当な観光料金が実現しない場合、観光需要の伸びは低く、経済的収益率は18%に留まることが予想される。

公的プロジェクトの投資額US\$1,920万ドルを全額低利借款でまかなったとしても、観光客の宿泊料金に最大でも6.29%の消費税を課せば返済できる。

8) プライベートプロジェクト・プログラムの実現方策

財源

プログラムと公共プロジェクトの実現のためには外国援助が不可欠で、無償援助、技術援助、低利借款等、様々な援助形態によるものを確保するよう努める。なお、低利借款の必要額は約1,920万ドル(プライスコンベンション、110万ドルを含む)である。返済原資は上記のように観光客からの外貨による収入である。

組織整備

観光庁(NTC)を早期に発足させ、観光庁の指導のもとプライベートプロジェクト・プログラムの実現に当たる。

今後の作業

プライベートプロジェクト・プログラムの実現を目指し、人的資源、資金の投入をはかる。そのためには、限られた資源、資金の投入に関する政府関係者の政策統一、外国援助に対する要請・獲得が必要であり、観光局、NTCの主導による実現のための政府内協議、援助要請手続き作業、環境アセスメントの実施が必要である。

プライベートプロジェクト・プログラムを、以下のスケジュールに従い実現するよう努める。

1999/2000年:	政府内手続き・財源調達
2000/2001年:	手続き・プログラム実施
2001/2002年:	プロジェクト設計・建設開始
2003(～2005年):	プロジェクト建設

1. 調査の経緯

1.1 背景

民主化以前のモンゴル国の観光産業は9割以上を占める旧ソ連からの旅行者の限定されたニーズに対応し、手つかずの自然と遊牧を主体とする独自の文化が融合した観光資源の大半は、大きな潜在力にもかかわらず、未開発の状況に置かれてきた。しかしながら、一連の市場経済化の過程で、観光産業を独占してきた国営旅行社が93年に分割民営化されたことを契機に、民間資本による観光開発が本格化し、1997年には8万人の国際観光客数を記録するなど、近隣諸国と伍して順調な伸びを示した。

このような状況下で、モンゴル国政府内に於いても、観光産業は経済成長の有力な手段であることをモンゴル国政府が認識し始めた。しかし、関連法規や組織の整備は緒に就いたばかりで、民間投資の呼び水となる道路や地方空港等の関連インフラの整備、民間業者や自治体による乱開発の自然環境及び地域社会への負荷の抑制、夏季への過度の集中の分散化等、有力な外貨獲得手段として観光産業を振興する上で、克服すべき課題が山積されている状況にある。

こうした動向を背景として、モンゴル国政府は、全国の観光開発基本計画の策定を開始することを決定、我が国政府に技術協力を要請した。

モンゴル国政府の要請に基づき、我が国政府は「モンゴル国観光開発総合計画調査」に関する技術協力を実施することを決定、国際協力事業団がその実施に当たることとなった。1997年10月、国際協力事業団は事前調査団をモンゴル国に派遣、モンゴル国インフラ開発省との間にS/Wの署名・交換を行った。

国際協力事業団は、株式会社パデコと日本工営株式会社の共同企業体をモンゴル国観光開発計画調査の実施担当調査団として選定し、1998年3月から調査が開始された。調査団は1998年3月～同年5月、1998年7月～同年11月の2次に渡りモンゴル国を訪問、全国観光適地の現地踏査、観光実態調査、関係機関との協議等を行った。日本国内では1998年12月～1999年5月にかけて、現地調査結果のとりまとめ及び報告書作成が実施された。

モンゴル国は、調査のカウンターパート機関としてインフラ開発省を当て、さらにインフラ開発省、自然環境省、文化省等を構成員とするステアリングコミッテイーを組織し、調査の効率的で有効的な実施に協力した。一方、日本国内において調査実施に対する助言のため、学識経験者等をメンバーとする作業監理委員会が設置された。

ステアリングコミッテイーメンバー、作業監理委員会メンバー及びJICA担当者のリストを調査団員リストと共に巻末に添付する。

1.2 報告書の構成

本報告書は、「モンゴル国観光開発総合計画調査」のファイナルレポートの要約版である。
本編ファイナルレポートは全て英文で以下の5巻より成っている。

1. 要約編
2. 1巻 現状分析
3. 2巻 マスタープラン
4. 3巻 実行計画
5. 4巻 付録

2. モンゴル観光の現状

2.1 観光需要

1) モンゴルの観光需要現況

モンゴルへの入り込み客数は年間8万人(1997年)で、このうち1万1,000人が日本人客である。8万人の内の約2万3千人が観光客で、残り約6万人は中国人(3.3万人)、ロシア人(9千人)を中心とするビジネス客である。日本人の観光客数は1万人(1997年)で、1990年からの日本人観光客数の年間伸び率は30%にも達している(1996年と1997年の間の伸び率は17%)。

国別のモンゴル入国者数

国/地域	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
アメリカ合衆国	900	2,034	2,412	3,217	4,110	4,322	3,834	5,019
日本	1,700	3,900	5,300	5,600	5,725	8,976	9,504	11,077
中華人民共和国	0	0	0	35,100	42,043	47,721	30,478	32,531
大韓民国	0	0	0	700	911	2,561	3,537	3,294
東アジア/太平洋	100	23	49	750	1,810	1,857	1,214	2,654
アフリカ/中近東	0	0	0	200	616	810	464	585
ロシア連邦	124,000	76,100	88,000	73,800	57,171	28,390	8,502	8,708
中央/東ヨーロッパ	8,800	3,900	1,300	610	1,036	1,441	1,755	2,538
ドイツ	1,200	1,700	2,100	2,200	2,560	3,502	2,782	3,339
その他ヨーロッパ	700	1,500	1,200	3,300	8,019	8,854	8,761	11,238
合計	137,400	89,157	100,361	125,477	124,001	108,434	70,831	80,983

出所：国防省

2) 観光需要調査結果

第2回現地調査(1998年7~8月)において観光客に対するインタビュー調査を実施した。インタビュー調査は、UB空港、UB市内ホテル、ハラホソ、南ゴビのゲルキャンプで実施し、有効回収数は以下の通り。

	日本人客	東アジアの客	欧米の客(中国客含む)	計
回収数	1,416	340	1,275	3,031

日本人客のインタビュー結果を以下に示す。

(インタビューの場所)

UB 空港	739	(52.2%)
UB ホテル	382	(27.0%)
ゲルキャンプ	295	(20.8%)
合計	1,416	(100%)

(性別)

男性	52.4%	女性	47.6%
----	-------	----	-------

(年齢)

60歳以上	24.5%	30歳-39歳	15.6%
50歳-59歳	23.8%	20歳-29歳	20.9%
40歳-49歳	14.1%	19以下	0.9%

(海外旅行経験)

10回以上	44.2%	2-4回	23.4%
5-9回	27.2%	初めて	5.2%

(団体、個人)

パッケージツアー	58.2%	個人旅行	41.8%
----------	-------	------	-------

(滞在期間)

4日	2.6%	7日	14.9%
5日	11.4%	8日	45.0%
6日	4.1%	9日	6.4%

(モンゴル観光経験)

初めて	79.0%
2回目	11.4%
3回以上	9.6%

(再訪希望)

はい	86.5%
いいえ	13.5%

3) 観光マーケット現況

(1) 世界との競争

日本人

モンゴルは日本から4時間と近いにもかかわらず、図2.1に示す様に長期間 (long-haul 8日～9日) のツアーが主流となっている。これはモンゴル観光の未成熟さ、SIT(Special Interest Tour)が主流であること、交通の不便さなどが原因と考えられる。

世界の観光マーケットでの日本人観光客の長期間ツアーは、以下の3態様に分けることができる。

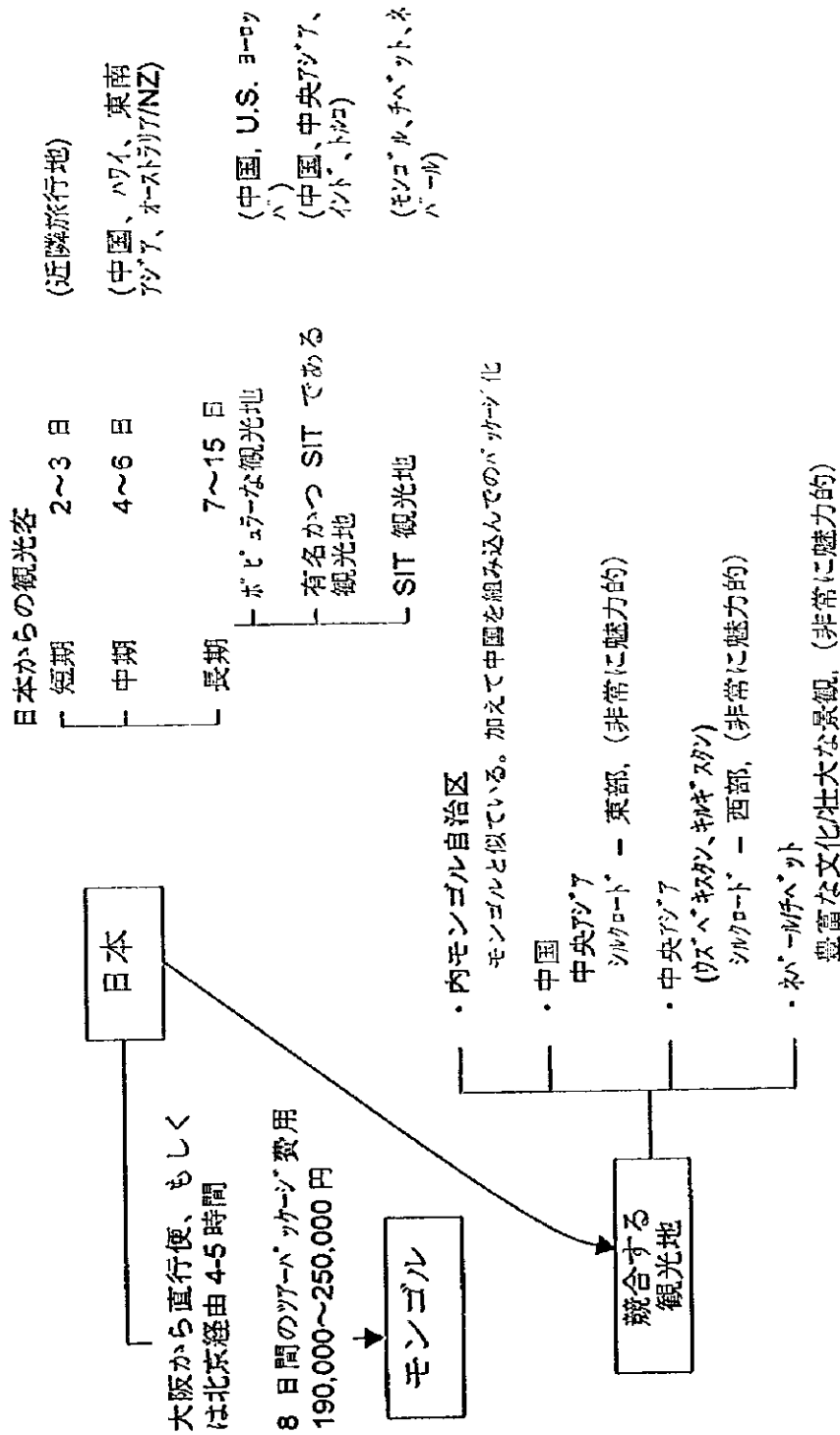
- ① 中国、米国、欧州等の人気の高い大規模なマーケット
- ② トルコ、エジプト、インド等一般観光とSITのミックスで中規模なマーケット
- ③ 内モンゴル、ネパール・チベット、中央アジア等のSITで小規模なマーケット

モンゴルはSITが主目的の③の中で競争している。当面の競争相手としては、

- 内モンゴル：観光内容が類似しており、モンゴル観光の直接的な競争相手
- 中国の内陸部：シルクロードの東端で文化歴史遺跡に富む。
- ネパール・チベット：SITの先進観光地。自然資源、文化歴史資源に富む。
- 中央アジア：ウズベキスタン、キルギス。シルクロードの中央部として文化歴史資源に富む。

モンゴルは、日本人市場の開発で特筆すべき優位性を持っている。

日本人観光客にとってのモンゴルの位置づけ



モンゴル国インフラ開発省

国際協力事業団

モンゴル国

観光開発計画調査

図2.1
日本人観光客にとってのモンゴルの位置づけ

株式会社パチコノ日本工業株式会社

- 距離の近さという最も効果的な強み（固有の風土・景観・民族、日本に最も近い砂漠など）
- モンゴルのイメージが確立しており（青い大空、広大な草原、遊牧の生活）、幅広い親近感が存在すること。
- 文化人・旅行・旅行など各層に多数のモンゴルファンが存在すること。
- アンケート調査結果にも見られる様に、再訪率が極めて高いこと。

そのいずれをとっても、欧米市場にないもので、適切な開発・振興策が推進されるならば、日本市場を拡大させる可能性は極めて高い。

欧米マーケット

欧米の観光客総数は、下表の通り 8,500 人に及ぶ。ビジネス客は、米国、ドイツが1位、2位を占めている。

欧米人のモンゴル観光の目的は、一生に1度のアジア旅行として位置づけており、タイ（ブータン）、インドネシア（バリ）がターゲット対象となっているのとは異なる。モンゴルは特異な自然と異文化観光の対象で（狩猟、恐竜発掘なども含む）、限られた観光マーケットである。

(1997年)	観光客	ビジネス客	計
米国	1,857	1,511	3,368
オーストラリア	371	442	813
北欧4カ国	1,535	865	2,400
英国	799	1,273	2,072
南欧	626	353	979
フランス	1,271	400	1,671
ドイツ	1,469	1,102	2,571
スイス	598	337	935
計	8,526	6,283	14,809

資料：JICA 調査団の推計

東アジア

東アジアからはビジネス客が多い。

(1997年)	観光客	ビジネス客	計
韓国	1,285	1,680	2,965
東アジア	644	842	1,486
計	1,929	2,522	4,451

資料：JICA 調査団の推計

2) 観光行動

日本人観光客のツアーは8～9日で、

- ウランバートル市：3日間
- ウランバートル郊外のゲルキャンプ（ハラリン訪問含む）：2日間
- 南ゴビのゲルキャンプ：2日間

の配分になっている。これからも判るようにウランバートル市、その周辺、ハラリン及び南ゴビに訪問地は限られている。

一方、欧米の観光客は2週間のツアーが主流で、以下の様なパターンである。

- ウランバートル市：5日間

- ハルホフ等のゲルキャンプ：3日間
- 南ゴビのゲルキャンプ：3日間
- テルメツ、セレンゲのゲルキャンプ：2日間

フランス人等のより長期な観光の場合（3週間）、ヘチ、アルツガイ（Horgo 山）が加わる。日本人観光客はモンゴルの草原体験といったソフトアドベンチャー、或いは歴史・文化体験が主であるのに対し、欧米人はジープ旅行、駱駝トレック、登山といったややハードな活動がこれに加わる。図 2.2 に、主要国別観光客の行動フローを図示した。

2.2 観光資源、施設の現況

観光地域

全国で 15 カ所の観光地域を設定した。観光地域位置を図 2.3 に示す。

歴史・文化観光資源

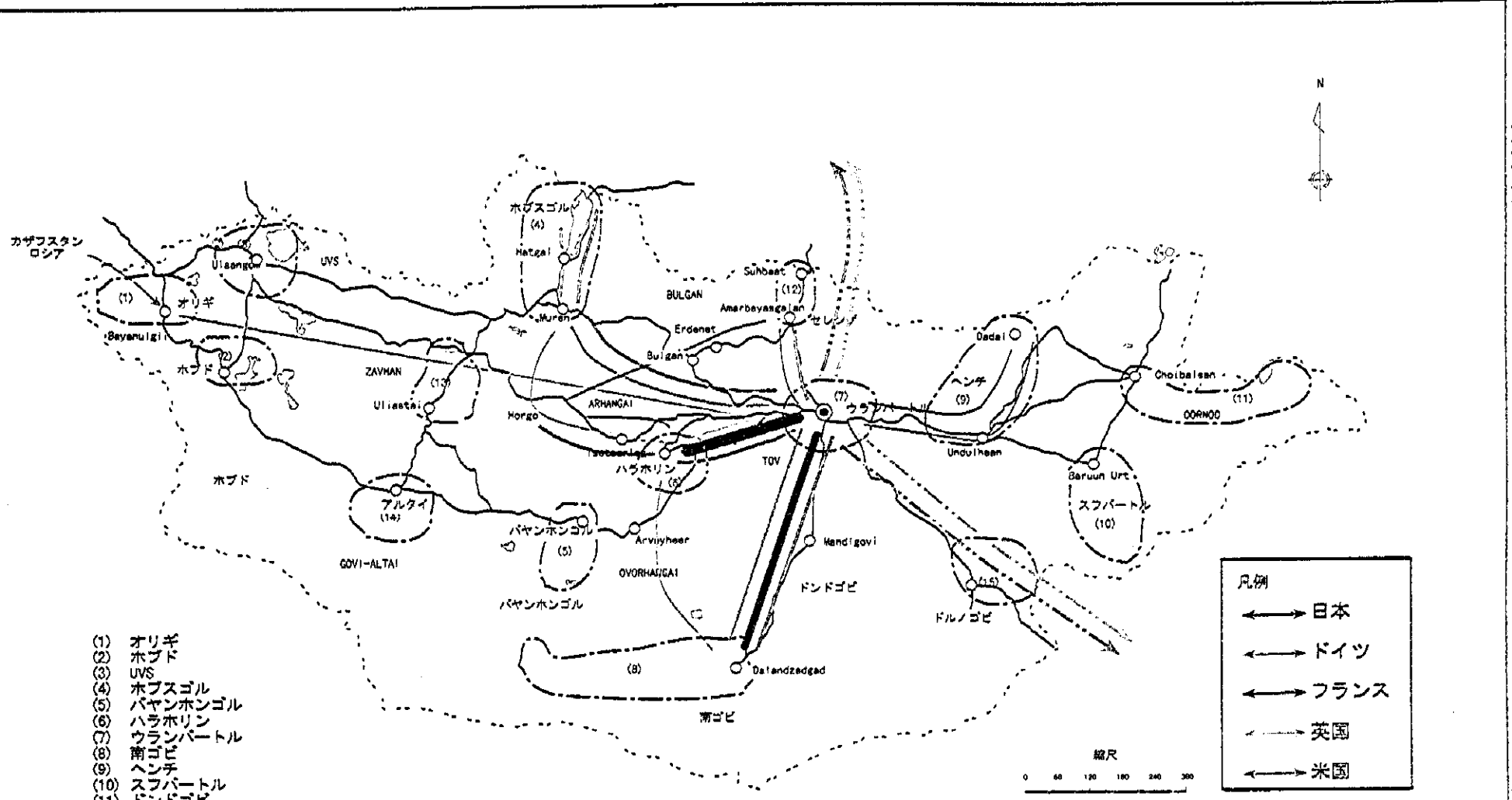
図 2.4 に示す如く、モンゴル国には多くの歴史・文化遺跡がある。残念な事にこれらの遺跡は十分な調査、保全がなされておらず、観光資源としての活用度は低い。特に、本調査のモデル地域である UB とハルホフには多くの寺院、博物館、遺跡があり、修復と保全、観光利用への整備が必要である。

温泉

モンゴル国には多くの温泉、鉱泉の存在が知られており、全国的に著名なもの、地元民が使うものなど、多様である。モデル地域ハルホフのオムル温泉には温水、温泥治療のための療養所があり、全国に知られている。近年、経済の停滞に伴い全国的に温泉利用が減少しているが、モンゴルの人々に昔から親しまれている温泉療養の再整備が望まれている。

2.3 観光行政の現況

- モンゴル国の観光行政は、インフラ開発省（The Ministry of Infrastructure Development）の政策計画局が政策立案を担当している。1999 年の組織改革で関係省庁・機関は環境省、文化省、UB 市及び各 Aimag の観光担当部、観光協会（Mongolian Tourism Association: MTA）、ホテル協会（Mongolian Hotels Association: MHA）等がエコツーリズム、歴史・文化遺跡保全、整備、地方の観光整備等において関与している。
- 政策実行エージェントである NTC（モンゴル観光センター）が 1999 年に設立され、政策実施を担当している。
- さらに関連省庁組織の関連強化のため、観光庁が MID の下に昨年設置。
- 観光法の制定は 2 度国会審議に掛けられたが、政治混迷のため、制定に至っていない。



- (1) オリギ
- (2) ホブド
- (3) UVS
- (4) ホブスゴル
- (5) バヤンホンゴル
- (6) ハラホリン
- (7) ウランバートル
- (8) 南ゴビ
- (9) ヘンチ
- (10) スフバートル
- (11) ドンドゴビ
- (12) セレンゲ
- (13) ZAVHAN
- (14) アルタイ
- (15) ドルノゴビ

凡例

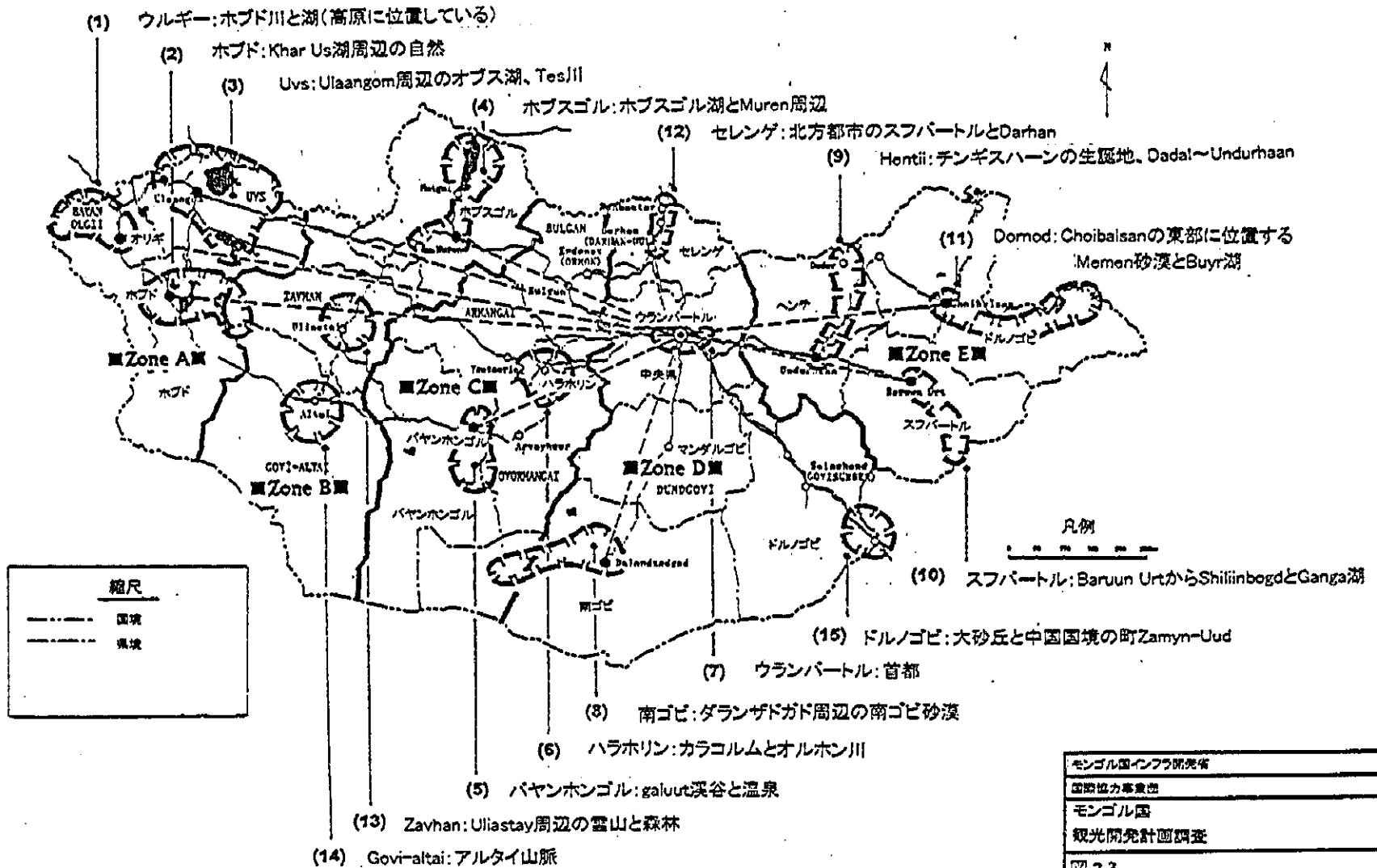
- ←→ 日本
- ←→ ドイツ
- ←→ フランス
- ←→ 英国
- ←→ 米国

縮尺
0 60 120 180 240 300

各国の代表的なツーリストパターン

モンゴル国インフラ開発省
国際協力事業団 (JICA)
モンゴル国 観光開発計画調査
図 2.2 各国の代表的な ツーリストパターン
株式会社パデコ/日本工営株式会社

モンゴルの代表的な観光地



モンゴル国インフラ開発省
国際観光事業局
モンゴル国
観光開発計画調査
図 2.3
モンゴルの代表的な観光地
株式会社パデコ/日本工営株式会社

モンゴルの観光開発総合計画調査

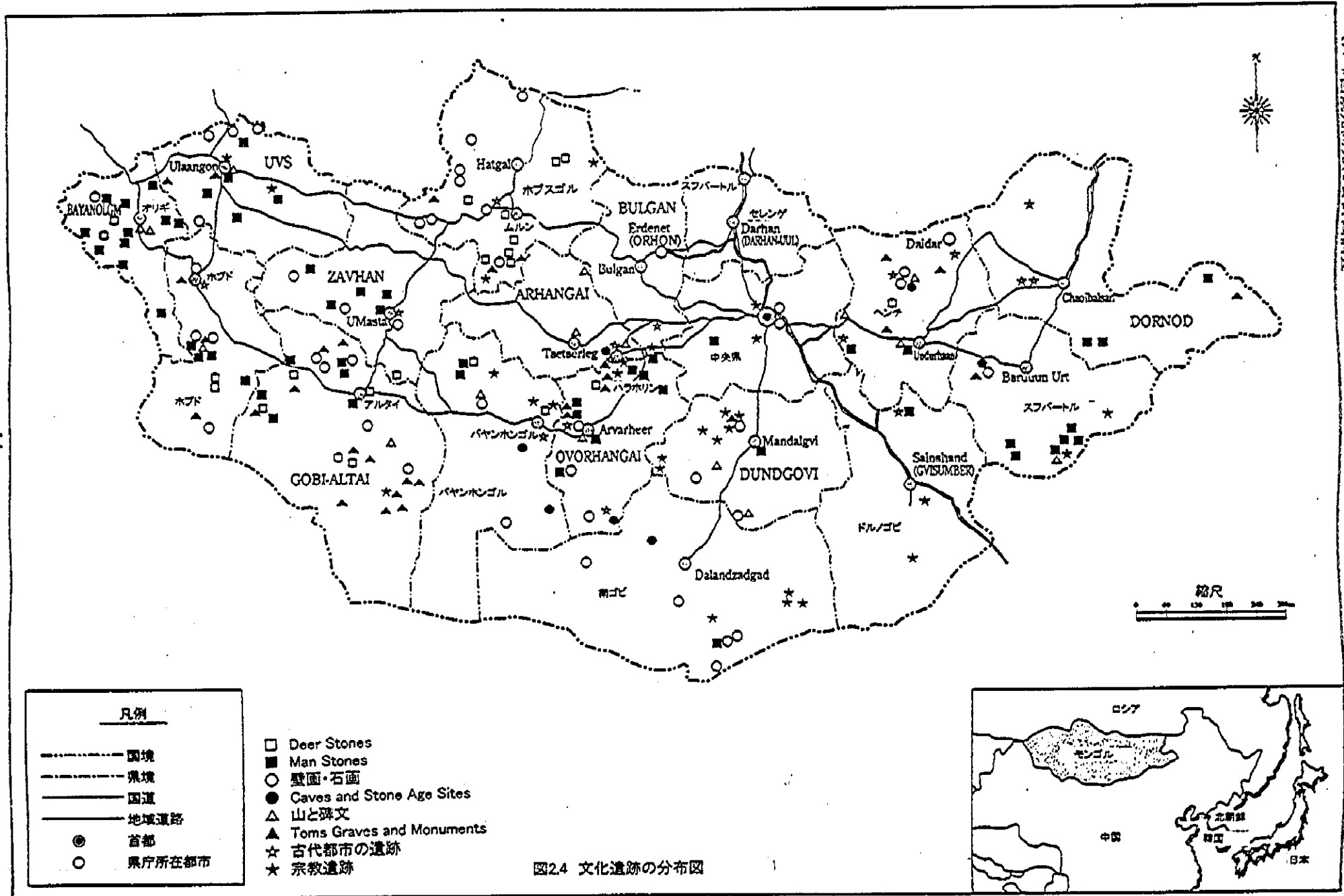


図24 文化遺跡の分布図

3. 全国の観光開発マスタープラン

3.1 モンゴル観光開発の基本方針

全国の観光開発マスタープランを作成するにあたり、以下の開発基本方針を設定した。

- 1) 国際観光客の目から見たモンゴルの観光資源は、他に類を見ない土地（景観）と人々（生活・文化）の共生である。この資源を核として観光開発を行う。
- 2) 損なわれていない自然（のイメージ）を今後とも保全する。
- 3) モンゴルの歴史・文化を基礎とした観光振興により、一層の発展を目指す。そのために、歴史・文化観光資源の保全と適切な観光利用を行う。
- 4) 上記3方針を達成するため、プロジェクト・プログラムを整備する。即ち、市場開拓、環境保護、歴史・文化資源の整備。
- 5) 観光産業に係わる人材を育成する。量的に増やすと共に、より高度な技術を持つ人材を公・民の両セクターにおいて確保する。公においては観光計画立案を含むマネジメント、環境保護マネジメント、市場開拓マネジメントなど、民は宿泊施設、レストラン等の投資と運営における洗練されたサービスのための教育が必須である。
- 6) 観光振興のためには、国際、国内航空サービスの改善が急務である。その他、観光地のトイレ、休憩所などの施設改善も必要である。NTC はインフラ整備担当する関連省庁・機関へ強く働きかけ、改善、整備の実現を図る。
- 7) 国際観光市場間の競争に負けないためには、観光産業のサービスレベルを向上させなければならない。サービスレベルの向上のためには観光産業を国際競争に晒すことが近道であり、海外の観光産業を立地させ国際競争の実態を示すことが望まれる。

3.2 観光需要予測

将来の観光需要は、WTO の世界及び東アジア・太平洋地域観光需要予測を参考に、マーケット各国の需要の伸びを想定して推計した。

(2000年までの需要)

協調的航空政策等本調査で提案している施策、整備プロジェクト・プログラムは、2000年時点では整備途上と思われる。又、アジア、ロシアの経済停滞も影響し、モンゴルを訪れる観光客の需要は低い伸びにとどまるものと思われる。

(2015年までの需要)

2000年以降は2つのシナリオを想定した。

シナリオ A (プロジェクト・プログラムを実施した場合)：提案の諸施策が実行され、現在の需要増が続くケース。

シナリオ B (プロジェクト・プログラムを実施しない場合)：諸施策の実行が遅れ、特に観光客需要の伸びが低くなるケース。

ロシア国観光開発総合計画調査

(入国者総数) (単位：千人)

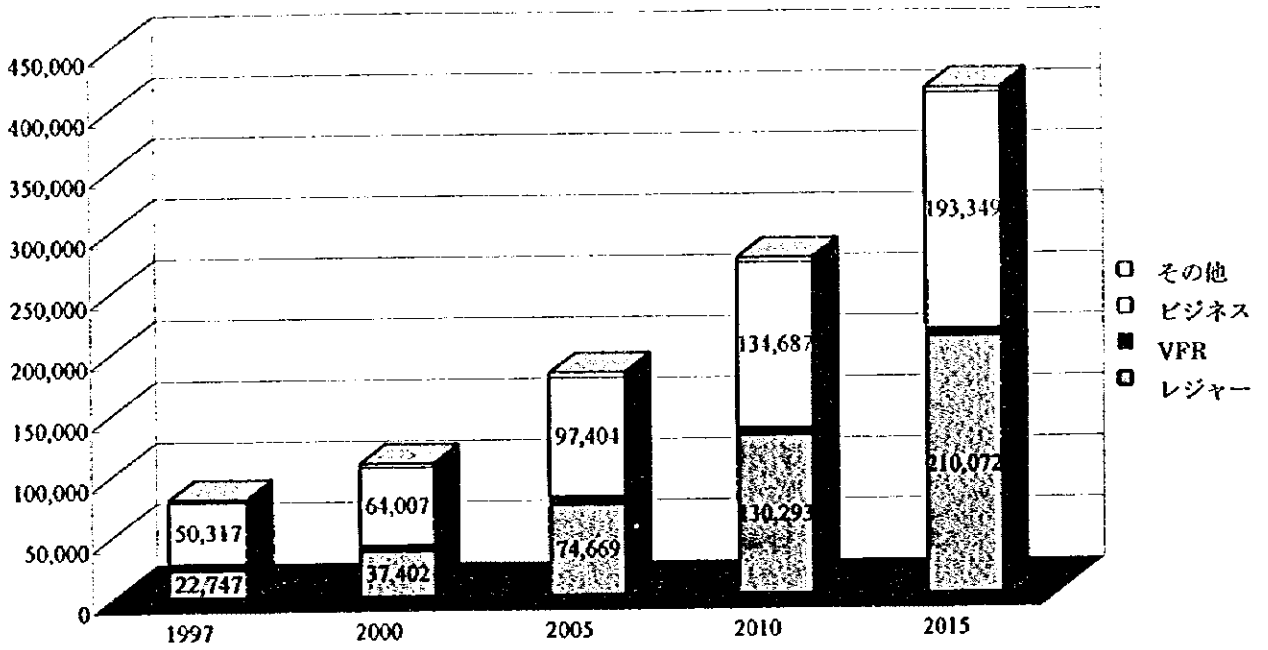
	1997	2000	2005	2010	2015
シオ財 A	81	109	182	275	414
内日本人	11	18	40	67	109
シオ財 B	81	107	172	242	347
内日本人	11	17	35	52	78

(観光客数) (単位：千人)

	1997	2000	2005	2010	2015
シオ財 A	22	37	74	130	210
内日本人	9	16	35	60	98
シオ財 B	22	35	64	96	143
内日本人	9	15	30	44	67

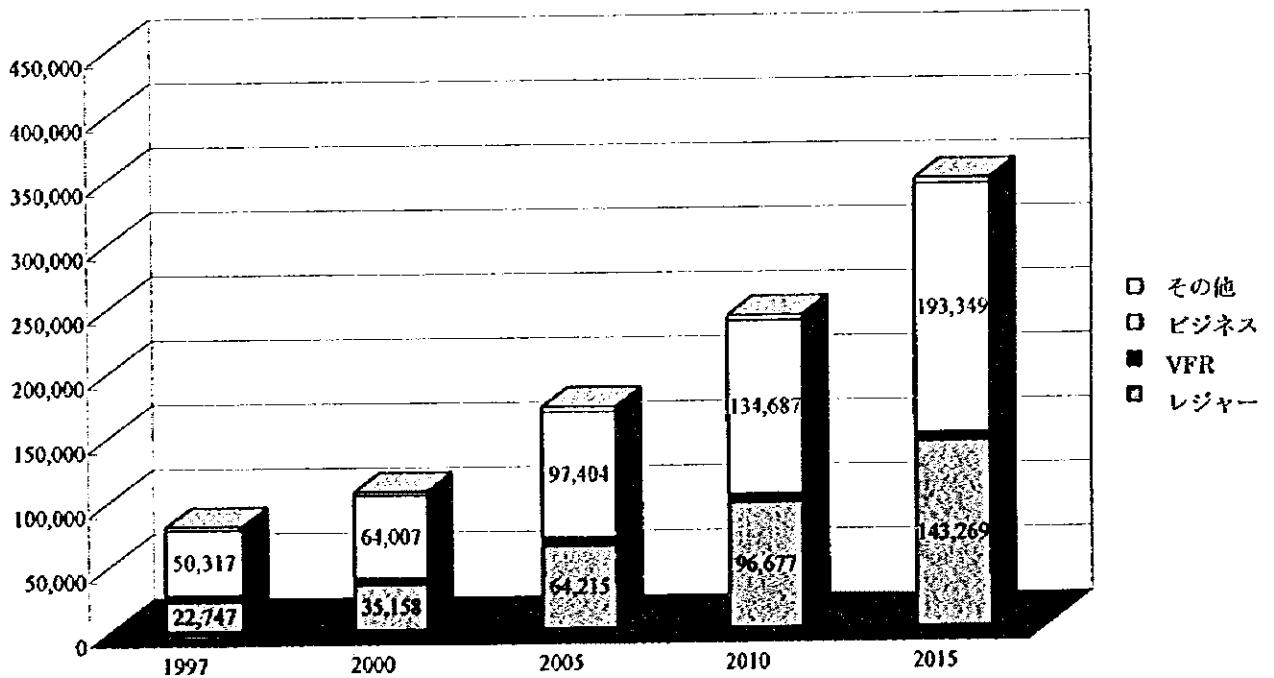
提案した諸施策、プロジェクト・プログラムを早期に実施することを前提に、シオ財 A を本計画のターゲットとする。

モコル国における外国人入り込み客需要の将来予測
(2015年、プロジェクト実施する場合)



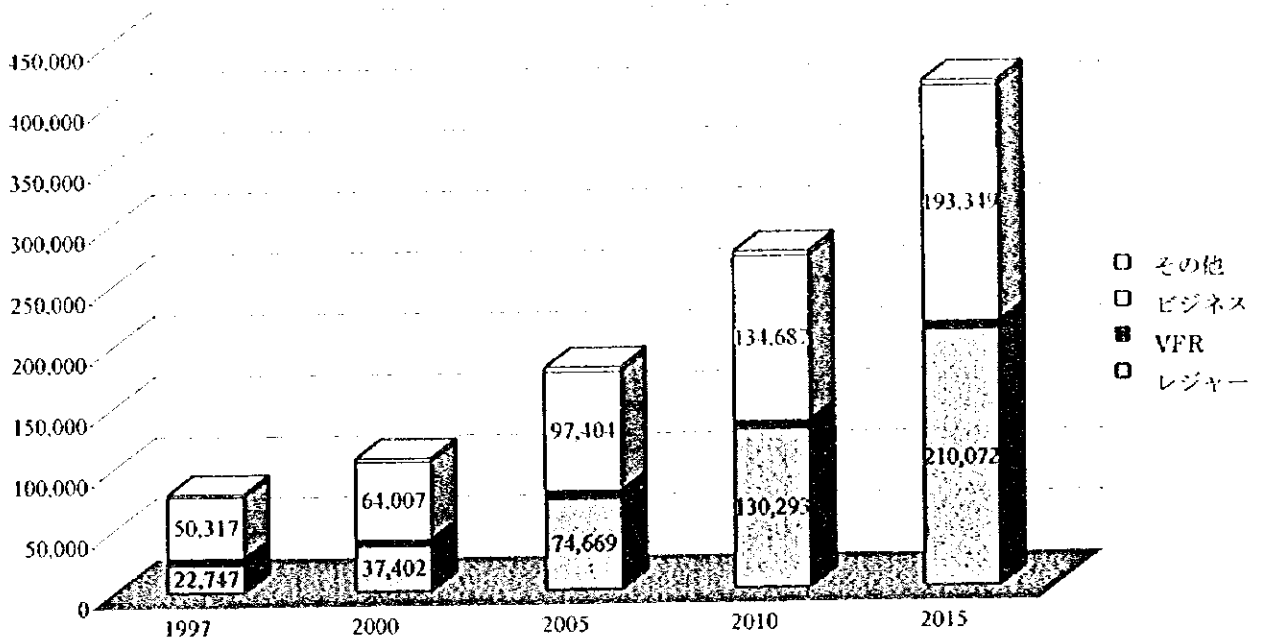
出所：JICA スタディーム

モコル国における外国人入り込み客需要の将来予測
(2015年、プロジェクト実施しない場合)



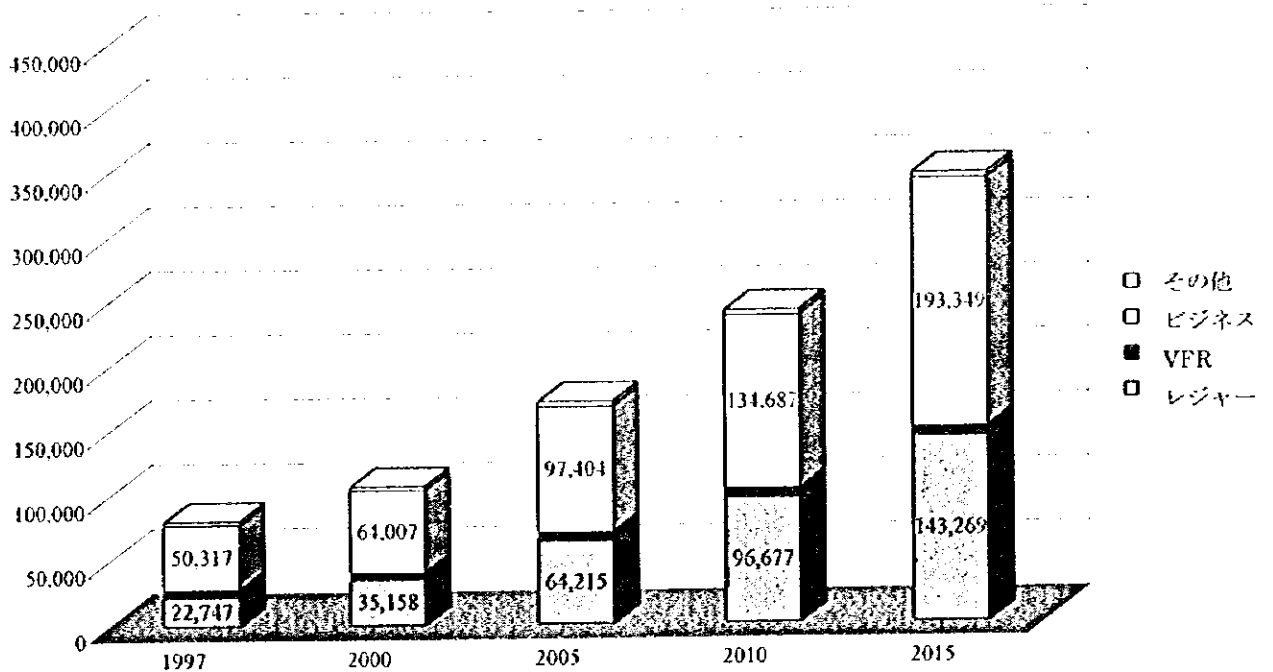
出所：JICA スタディーム

モンゴル国における外国人入り込み客需要の将来予測
(2015年、プロジェクト実施する場合)



出所：JICA スタディチーム

モンゴル国における外国人入り込み客需要の将来予測
(2015年、プロジェクト実施しない場合)



出所：JICA スタディチーム

3.3 観光地域の開発方針

知名度、観光資源、観光施設整備状況、インフラ整備状況を考慮して各観光ゾーンを評価した。結果は下表の通りであり、UB、ハラホフ、南ゴビが最も高い評価、フフスグル、ヘフ、西部地域 (Oligii, Hovd, Uvs)、Dornogovi がそれに続く評価である。これ以外のゾーンの評価は低い。

観光地の評価

		知名度	観光資源	観光資源のポテンシャル	観光施設整備状況 (宿泊施設, レストラン, etc.)	インフラ整備状況	評価
1	UB & 周辺	○○	△	△	○	○	A
2	ハラホフ	○○	△	○	○ (カシヤフ)	×	A
3	南ゴビ	○	○	○○	○ (カシヤフ)	×	A
4	フフスグル	△	○	○	△	×	B
5	ヘフ (Dadal, Delgerhaan)	△	△	○	△	×	B
6	西部地域 (オリギイ, ホブド, UVS)	×	×	○○	×	×	B
7	ドルノゴビ	×	×	○	×	○(鉄道)	B
8	ハーンゴビ	×	×	○	×	×	C
9	Menen & Buyr, Dornodo	×	×	○	×	×	C
10	Shilinbogd, スフハートル	×	×	△	×	×	C
11	Bulgan, セレンガ	×	×	○	×	×	C
12	Govi-Altai	×	×	△	×	×	C
13	Zavhan	×	×	△	×	×	C

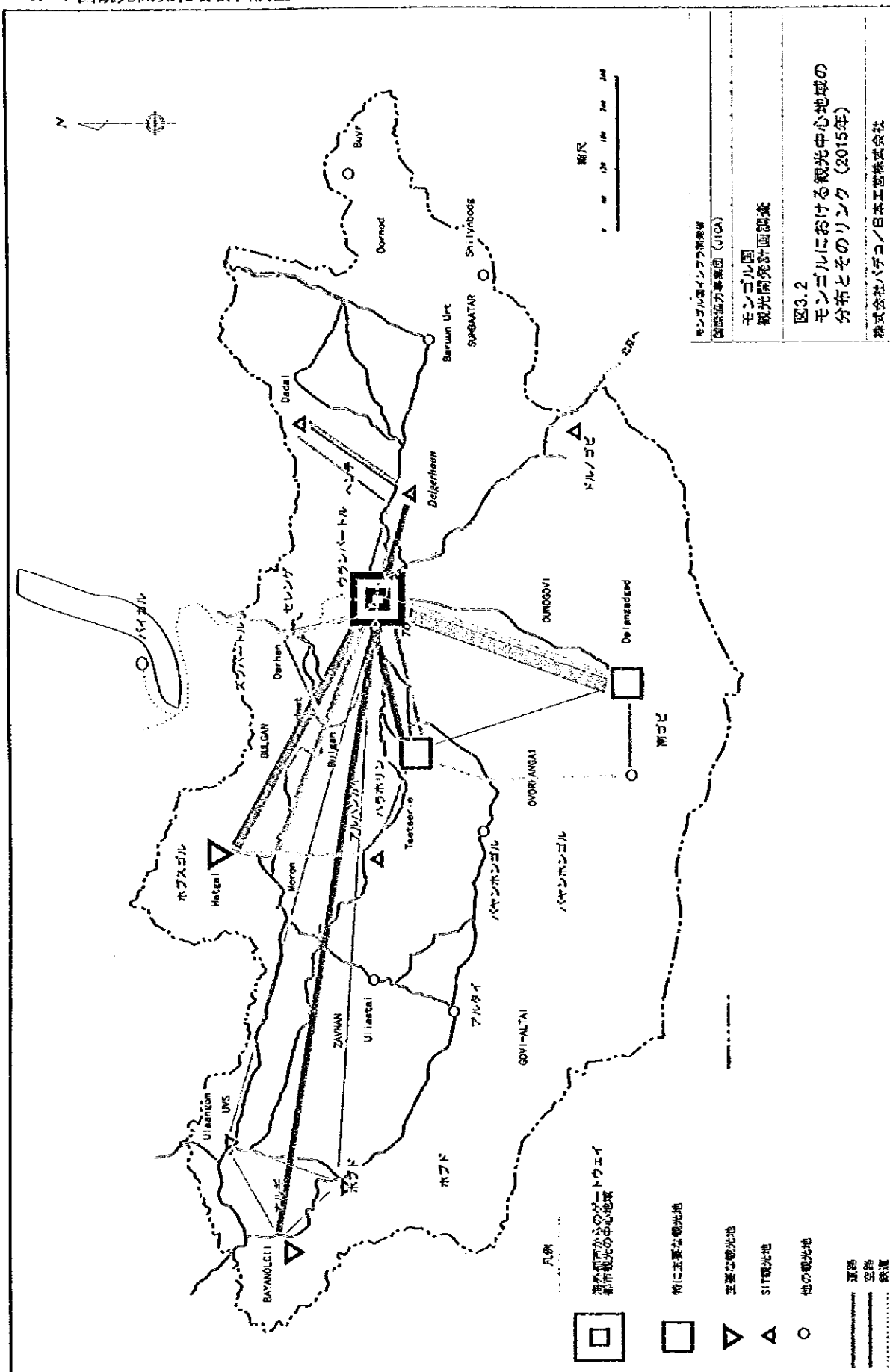
Note : ○○excellent ○good △poor ×bad

この評価を踏まえ、以下の地域的観光開発を推進するものとした。

2005年：A 評価の UB、ハラホフ、南ゴビを主要な観光地域 (Primary Tourism Core) とし、B 評価のフフスグル、ヘフ、西部地域、ドルノゴビを SIT 観光地域 (SIT Tourism Destination) として整備する。

2015 年には、A 評価を主要な観光地域に、B 評価を主要観光地を補足する 2 次観光地域とし、残りの C 評価を SIT 観光地域とした。

以上の開発の考え方をもとに、2005 年、2015 年における観光地域開発のコンセプトを図 3.1 及び図 3.2 に示した。



3.4 観光開発計画

1) 歴史・遺跡観光の振興

- モンゴルの歴史・文化遺跡の、①調査、②保全、③周辺環境の改善、④アクセス道路整備/改善、⑤観光用説明資材の整備が必要である。それぞれの歴史・文化遺跡は広大な国土に散らばっており、遺跡場所への観光客の誘導、ビジターセンターでの観光客への説明と休憩施設。
- 遺跡の調査、保全、観光活用の作業を担当する組織の強化が必要である。モンゴル文化庁（中央政府組織）、モンゴル文化基金（NGO）等。
- UB 等で観光客の訪問地となっている博物館についても、説明、陳列、ガイド、休憩・サービス等の改善。

2) 遊牧文化観光の振興

- モンゴルにおける遊牧生活文化の観光資源化（例えば、モンゴル文化パークの開発と遊牧民の参加による遊牧生活の紹介）
- 遊牧民の参加による観光資源開発（ハドクワトの土産品製造、酪農製品の土産物化・宿泊所への供給）
- 遊牧民の参加による観光プログラム外開発（乗馬教室、フェルト織り教室等）

3) 観光プログラム外の強化

UBにおけるゲートウェイ観光の振興

(中心市街地での整備)

- 観光客が集まるツーリストストリート、プラザの整備
- 半日/1日の観光トレイル整備
- 全国及びUBの観光情報の整備

(郊外部での整備：外国人居住者、UB市民も含め)

- 郊外地でのピクニック
- 自然テーマパーク（ハートパーク、乗馬パーク）
- 新たなスポーツ活動の導入（熱気球、サイクリング等）
- スキー、ゴルフ等のスポーツ導入

新規観光活動の振興

スポーツ観光、列車による観光を振興する。

	短期のプログラム	長期のプログラム
地上でのスポーツ	バイケルモトクロス	ハートトレッキング
スキー・スポーツ	熱気球 パラセイリング パラグライダー ハンググライダー	動物化センター
ウォーター・スポーツ	フィッシング	カヌー、釣り、ラフティング
列車による観光	ゴビ(Ulaan Uul) ツー	ロシア国境ツアー

3.5 組織・制度の整備

項目		内容
政府組織・制度整備	モンゴル観光センターの設置 (NTC)	観光施策の実施
	地方行政機関における観光担当部門の強化	重点県における“観光部”の設置 要員増強
	許認可、安全性等のコントロール強化	<ul style="list-style-type: none"> 観光産業の免許制度強化 観光に関する土地開発許可 安全規準整備 ホテル、レストラン格付け等
	地元住民、国民の啓蒙	資料整備、説明会、学校教育、修学旅行等
民間組織整備	ホテル	セミナー、トレーニングによるホテルサービスの向上 国際ホテル・トリップへの掲載
	ガイドオペレーター	<ul style="list-style-type: none"> MIAT、国鉄のMTA 入会促進と新旅行プログラムの創設 海外観光協会との連携
	レストラン	MHA への入会促進と協会章の整備、褒賞制度整備
投資振興	投資インセンティブの観光産業への適用	<ul style="list-style-type: none"> 所得税の3年間免税、3年間 50%軽減 (4スター以上のホテルなど) 所得税の5年間免税、5年間 50%軽減等 (冬季観光サービス業) 環境負荷の少ない先進的なリゾートキャンプの整備に対し、税制優遇 開発用地の優遇的借地 (長期、低価格、簡素な手続き等) 等
マーケティング	海外でのマーケティング	<ul style="list-style-type: none"> 海外セミナー開催 海外観光フェアへの参加 海外観光協会との連絡 Visit Mongolia Year in 2005 の設定等 国際会議の積極的誘致 海外事務所開設
	国内でのマーケティング	<ul style="list-style-type: none"> 資材の整備 (ビデオ、パンフ等) イベント、祭、国際会議等の積極的開催 ナナム祭拡大 (国際芸術団体の参加等)

3.6 インフラ施設整備

道路整備

- UB—ハラホリン間 380km の国道はモンゴル観光の幹線道路であり、高速走行 (平均 100km/時) に適した舗装面等の改善が必要である。現在 6 時間の走行時間を 4 時間程度に短縮。
- UB—南ゴビ間の 580km 未舗装道路を整備する (長期的目標)。
- ハラホリン—南ゴビ間を結ぶ道路は現在無いが、長期的に整備し、UB—ハラホリン—南ゴビの 3 拠点をルート化する。
- その他
 - ・ 長距離走行の休憩所を UB—ハラホリン幹線道路に整備する。
 - ・ 道路標識の整備 (幹線道路)

- ・ リンカーシステムの整備（長期的目標）

国内航空網整備

- 民間への運営移譲の早期実施。但し、安全性確保の方策も併せて実施。
- 空港施設の民営化促進（安全運行に係わる部分についてはCAAが管理）
- サービス改善
 - 予約システム、チェックイン、搭乗システムの改善（特に、地方からの復路）
 - 定時運行
 - 安全な機材の早期導入

国際航空サービス改善

- 提携運行による効率的な航空運行
- 妥当な航空輸送料金等による妥当な旅行価格の実現
- 航空会社間の協調的なグループへの参加
- サービス改善

汚水処理

ゲルギャンブ（ゲル50棟/箇所）から出る汚水量は20m³/日（0.23リットル/秒）と少ない。それ故浄化槽で処理した上澄み液を、排出しても問題はないものと思われる。但し、放流先の流量が少なく汚水に対してモンティイブなものが下流にある場合（住戸、貴重動植物等）は、より慎重な対応が求められることもあり、具体的プロジェクトの実施段階において検討する。

通信

地上通信ネットワークを県都ヤムからゲルギャンブへ伸張することは高くつくことになる。ゲルギャンブでは衛星通信システム（Inmarsat Satellite System）の利用を促進する。

給電

投資コストの金額が大きく違う（ディーゼル発電：風力発電：太陽発電=1:10:50）ことから、風力発電：太陽発電を早期に普及させることは難しいものの、運転コストが低廉なこと、観光客が求めていること（特にエコ туриスト）などを材料として、普及を推進する。

3.7 人材開発

職業訓練

観光需要の伸びに合わせ、観光産業従事者を増強する必要がある。2015年には1000人のコック、800人のウェーターが不足することが想定され、職業訓練の強化が必要である。現在ICB、ITMが観光関連の職業訓練を行っており、これらの機関の強化が現実的である。

高等教育

観光に関する高等教育の強化のためには、教師陣の強化が先決である。外国人講師の

招聘、モンゴル人教師の海外研修、教材の整備、改善も急務で、教科書の改善、実習機材の整備。さらに、既存大学、カレッジの観光学科の重複を整理・統合、新たな科（科目）の整備。特に総合カレッジコースの整備は急務である。

その他

観光産業に携わる人の再教育、特にマジョークラスの再教育が必要である。海外研修、外国人インストラクターの招聘が一部行われており、この強化が必要である。

地方ゲルキャンプの従業員の研修訓練を冬季閑散期に奨励することが必要である。UBのITM、ICBなどに短期コースを設置することが必要である。

3.8 環境保全と観光開発

環境管理プログラムの提案

センシティブなモンゴルの自然を保護しつつ、観光を振興するためには、有効な環境管理プログラムを策定・実施する必要がある。現在、UNDP, WWF, GTZ等の国際機関がモンゴルの環境保全のため多くの援助を実施中であるが、以下のプログラムが追加的に必要である。

- 野生生物管理プログラム
- 化石管理プログラム
- エコツアー周遊プログラム
- 国際エコツアー周遊プログラム
- パートリョツンガ周遊プログラム
- エコツアーと自然観光ツアーの安全管理プログラム
- 遊牧民の土地管理プログラム

緊急プロジェクト・プログラムの提案

- レンジャー、ガイド、通訳及び遊牧民に対する教育、訓練。職業訓練校コースの整備
- 環境保護地域の紹介資料整備
- モンゴルの動植物を紹介する資料整備
- 事故救援プログラムの整備と実行
- パートリョツンガパークの整備

3.9 観光開発の効果

GDPに占める割合

観光産業のGDPに占める割合は4.0%である。東南アジア各国のそれが4.5%（1995年）であり、ほぼ東南アジアの観光産業と同様な率である。

GDP に占める観光セクターのシェア¹
(1997年価格)

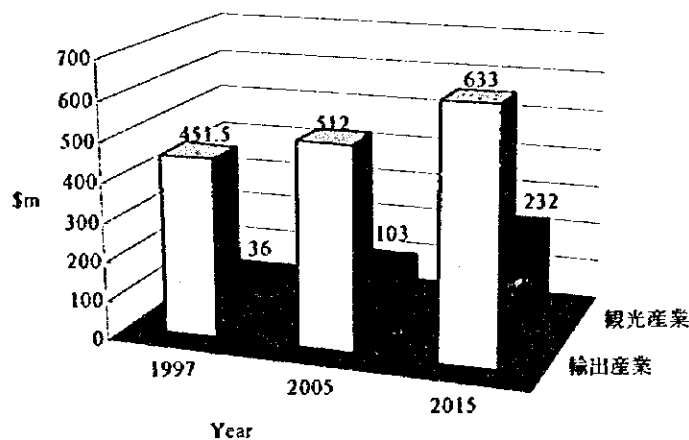
	(Tgm)
	1997
GDP	737,039
観光セクター	29,469
GDP にしめる観光セクターのシェア (%)	4.0%

出所：JICA ステアチーム

外貨獲得

輸出産業の1996年外貨獲得額は4億2,400万ドルで、観光産業は2,900万ドル(6.8%)である。観光産業の急成長と共に観光産業の外貨獲得額は急増し、2015年には2億3,200万ドルになるものと予想される。

輸出産業と観光産業の外貨獲得額の将来予想



出所：JICA ステアチーム

雇用効果

観光産業の直接雇用人口は1997年に約2,300人で、全労働人口112万人の0.2%である。これが2005年に4,000人、2015年に12,000人となるものと予想される。人口の伸びが年1.4%に対し、観光産業の雇用増加は年間10% (2015年迄)であり、雇用の受け皿として観光産業が有効であると考えられる。

¹ Tourism receipt (観光収入) は、国際レジャー観光客からの収入のみで、国際航空運賃は含まれていない。

4. モデル地域別観光開発マスタープラン

4.1 ウランバートルの観光開発マスタープラン

1) UB 観光開発の基本方針

開発コンセプト

- モンゴ国国際観光のゲートウェイ（空と陸（鉄道）の玄関）としての役割強化。
- 都市観光機能の強化。
- 歴史・文化・伝統・ビジネス・国際会議等、全ての観光活動を振興。
- 郊外地での新規観光アトラクションの整備

開発戦略

- モンゴ国唯一の都市観光地としての整備。
- 博物館、その他観光地での近代的な説明、案内、施設を整備。
- ホグドハーン等歴史・文化施設を近代的観光施設に改善。
- ゲートウェイ都市の中心に、観光客の集まる地区を整備する（ツリストストリート、プラザ、ツリストトレイル等）
- 新規観光の整備（ハートパーク、ホースパーク等）
- 観光関連産業の改善、振興（土産物製造・販売、レストラン、ケータリング等）

2) 観光需要予測

UB の将来の観光客の需要予測結果は以下の通りである。

	(人・泊)		
	観光	ビジネス	計
① 現況(1997年)	94,280	216,841	311,121
② 2005年	306,000	438,000	744,000
③ 2015年	862,000	955,000	1,817,000

宿泊施設の需給バランス

2005年：ピークシーズン（7月、8月）には現在の約1.5倍、ゲルキャンピング容量を若干上回るが、その他の時期は半分以下の稼働率である。

2015年：7月、8月に現在の宿泊容量の3倍の需要が見込まれる。

3) 観光開発計画

図 4.1 及び図 4.2 に、UB 地域における 2005 年、2015 年の観光開発計画を示した。市中心部における観光施設再開発、郊外部における観光アトラクション整備が中心。

4) 観光施設計画（主要なもの）

ツーリストトレイル：UB 市中心部の観光コース整備。

ツーリストストリート：観光客が集まる街区を UB 中心部に整備する。市構想の“UB 商業中心 2005”地域と並行して走る良好な景観の街区を、ツーリストストリートとして整備。

バードパーク：UB 国際空港西北の沼沢地に国際観光客及び市民のための、野鳥観察、学習施設を整備。

ホースパーク：乗馬施設と馬の博物館。

ハートクラフトセンター：ツーリストストリートの一画に、工芸センターを整備。土産物の企画、デザイン、製造、販売を行う。

（歴史・文化施設整備）

ボグドハーツ博物館整備：陳列、収蔵、防犯、管理施設の改善・整備、建築物の補強を行い、UB 市内観光の拠点とする。

モンゴリアン文化パーク：遊牧民の生活様式を見学、実体験できる博物館的テーマパーク。UB 近郊でハラホソへ至る国道沿線が候補地である。

（環境関連施設整備）

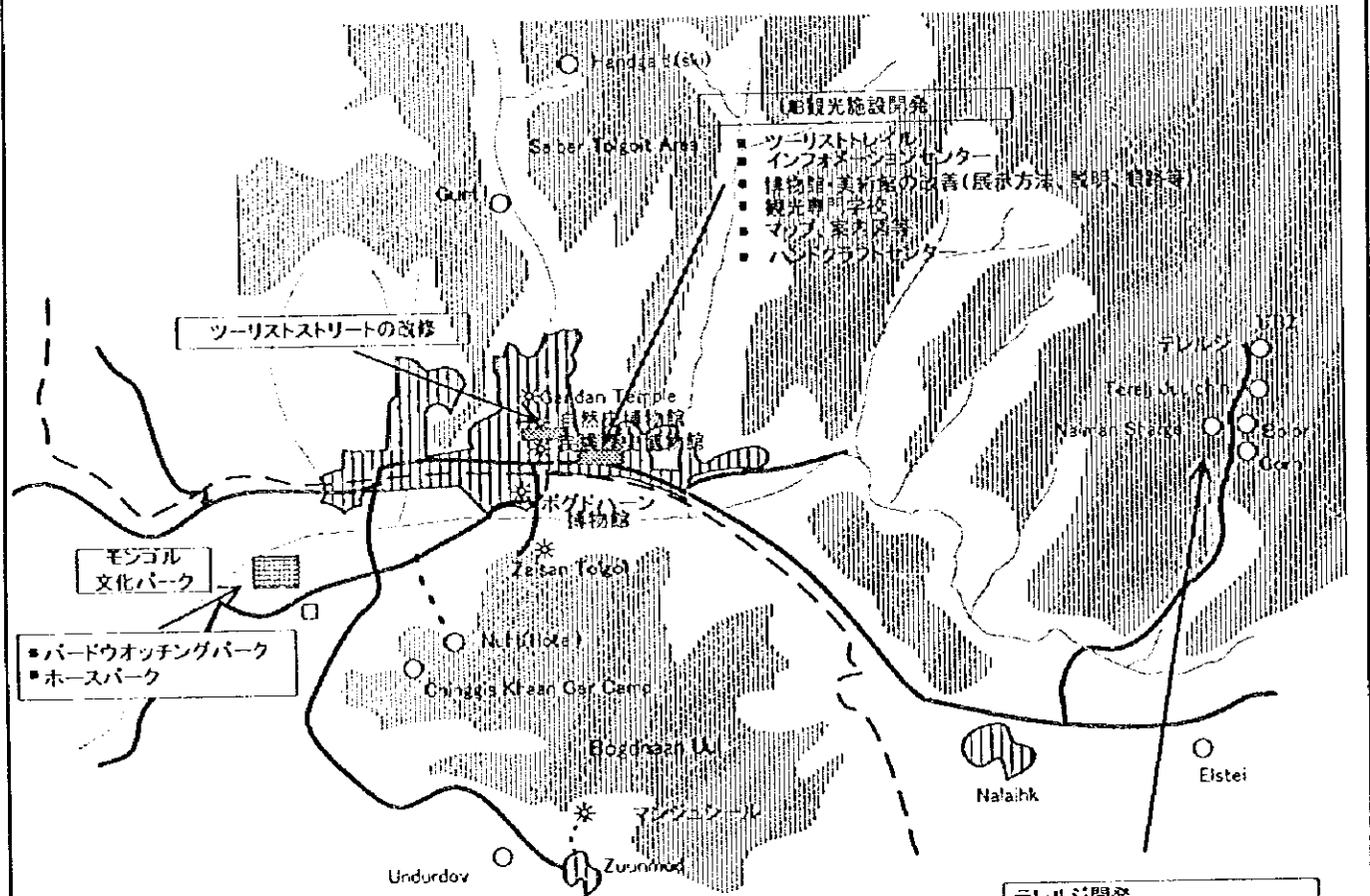
エコツーリズム、ネイチャーツーリズムの企画立案、ガイド、インストラクター等の育成のため、UB の職業訓練校に人材育成コースを新設。

5) 林業・テイング インフラ計画

道路交通

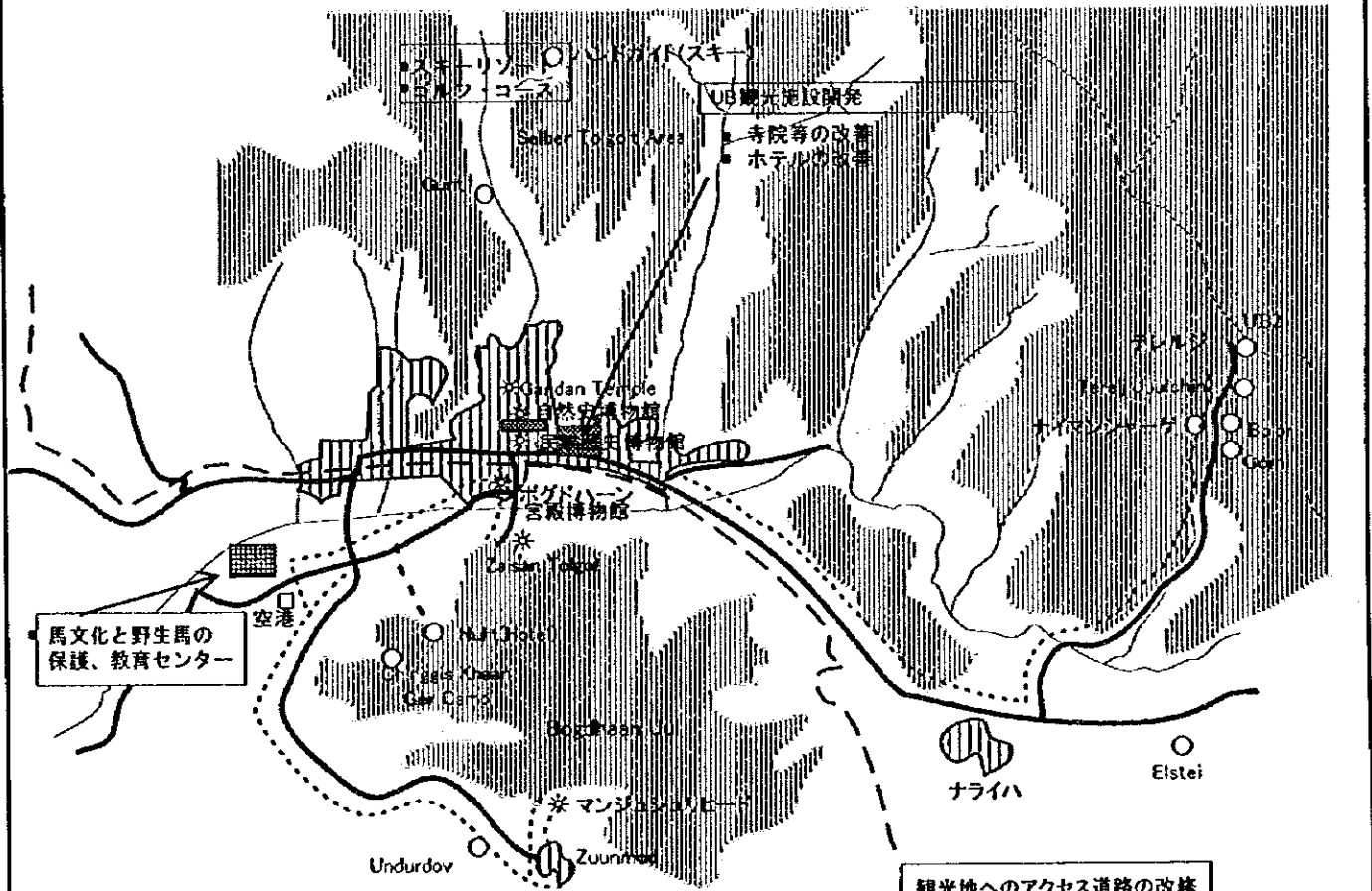
- テレホソ、マソジュン等郊外観光地へのアクセス道路の改良。
- 道路標識、観光標識、照明設備

ウランバートルの観光開発コンセプト (2005年)



モンゴル国インフラ開発省
国際協力事業団
モンゴル国 観光開発計画調査
図4.1 ウランバートルの 観光開発コンセプト (2005年)
株式会社パデコ/日本工営株式会社

ウランバートルの観光開発コンセプト (2015年)



馬文化と野生馬の保護、教育センター

UB観光施設開発
寺院等の改善
ホテルの改善

観光地へのアクセス道路の改修

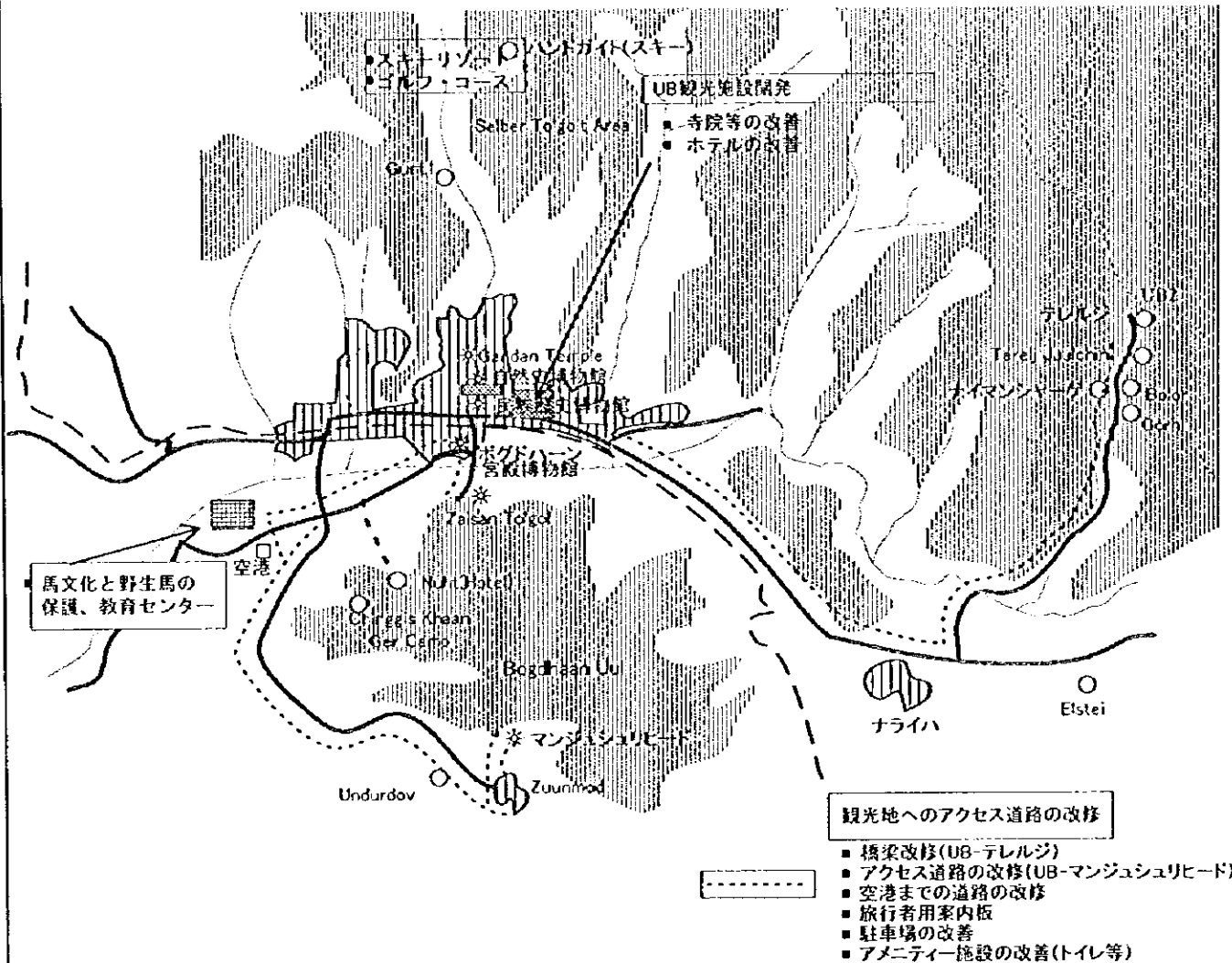
- 橋梁改修(UB-テレルジ)
- アクセス道路の改修(UB-マンジュシュリヒード)
- 空港までの道路の改修
- 旅行者用案内板
- 駐車場の改善
- アメニティー施設の改善(トイレ等)

モンゴル国インフラ開発省
国際協力事業団
モンゴル国 観光開発計画調査

図4.2
ウランバートルの
観光開発コンセプト (2015年)

株式会社バデコ/日本工営株式会社

ウランバートルの観光開発コンセプト (2015年)



モンゴル国インフラ開発省
国際協力事業団
モンゴル国 観光開発計画調査
図42 ウランバートルの 観光開発コンセプト (2015年)
株式会社パデコ/日本工営株式会社

4.2 ハラホリンの観光開発マスタープラン

1) 観光開発の基本方針

開発コンセプト

- モンゴルにおける文化観光の核として整備
- 文化観光ノ核を補完する機能の強化（ホジルト温泉、オルホン滝）
- 国内観光のための健康・療養機能の強化

開発戦略

- エルデニズーにおける近代的なプレゼンテーション、案内、設備の導入
- ハラホリンの歴史、文化遺跡の総合ビル（エルデニズー、カフコム遺跡、亀岩アクセス道路、駐車場、案内標識等）の改良、景観の美化
- ハバカス、ホジュウダム遺跡における近代的な説明、案内、アニマーの導入
- オルホン滝等における自然観光プログラムの導入（近代的な説明、案内、設備）
- プルムにおけるツツアトベンチャー、活動型観光プロダクトの導入
- 国内観光を目的としたプルム温泉療養施設の改善

2) 観光需要予測

ハラホリンの将来の観光需要予測結果は以下の通りである。

	観光計（人・泊）
① 現況(1997年)	25,481
② 2005年	82,000
③ 2015年	233,000

宿泊施設の需給バランス

2005年：8月には、現在のベッド容量の約20%増の需要が見込まれる。

2015年：ピークシーズン（7月、8月）においてのみ現在のベッド容量の約3倍の需要が見込まれる。

3) 観光開発計画

図4.3及び図4.4に、ハラホリン地域における2005年、2015年の観光開発計画を示した。短期にはハラホリンにおけるエルデニズー寺院周辺整備、ビジターセンター、突藏遺跡/ウカス遺跡とハラホリンを結ぶ道路ネットワーク整備等、ハラホリン中心部の開発を行い、長期的にはプルム温泉、オルホン滝等のハラホリン南部、及びバリン湖を經由して北部アムガイ県 Horgo 火山へのルート整備等広域の整備。

4) 観光施設計画（主要なもの）

ビジターセンター

エルデニズー寺院近傍に、ハラホリン観光の中心となるビジターセンターを整備する。ビジターセンターでは、ハラホリン地域に勃興した民族・王朝の歴史を観光客等に紹介すると共に、カフコム帝都等の遺跡・埋蔵物などの保全・保管・管理機能を持たせる。

エルデニゾー寺院（博物館）の改善

エルデニゾーの塼、寺院等の修繕が 1996 年～2000 年に行われるが、周辺環境、付属施設についての整備は手当がなされていない。観光客の周回道路、駐車場、案内・説明板、休憩施設の整備、及び寺院（博物館）のディスプレイ、保管施設、保安施設の改善。

5) サルティンクインフラ計画

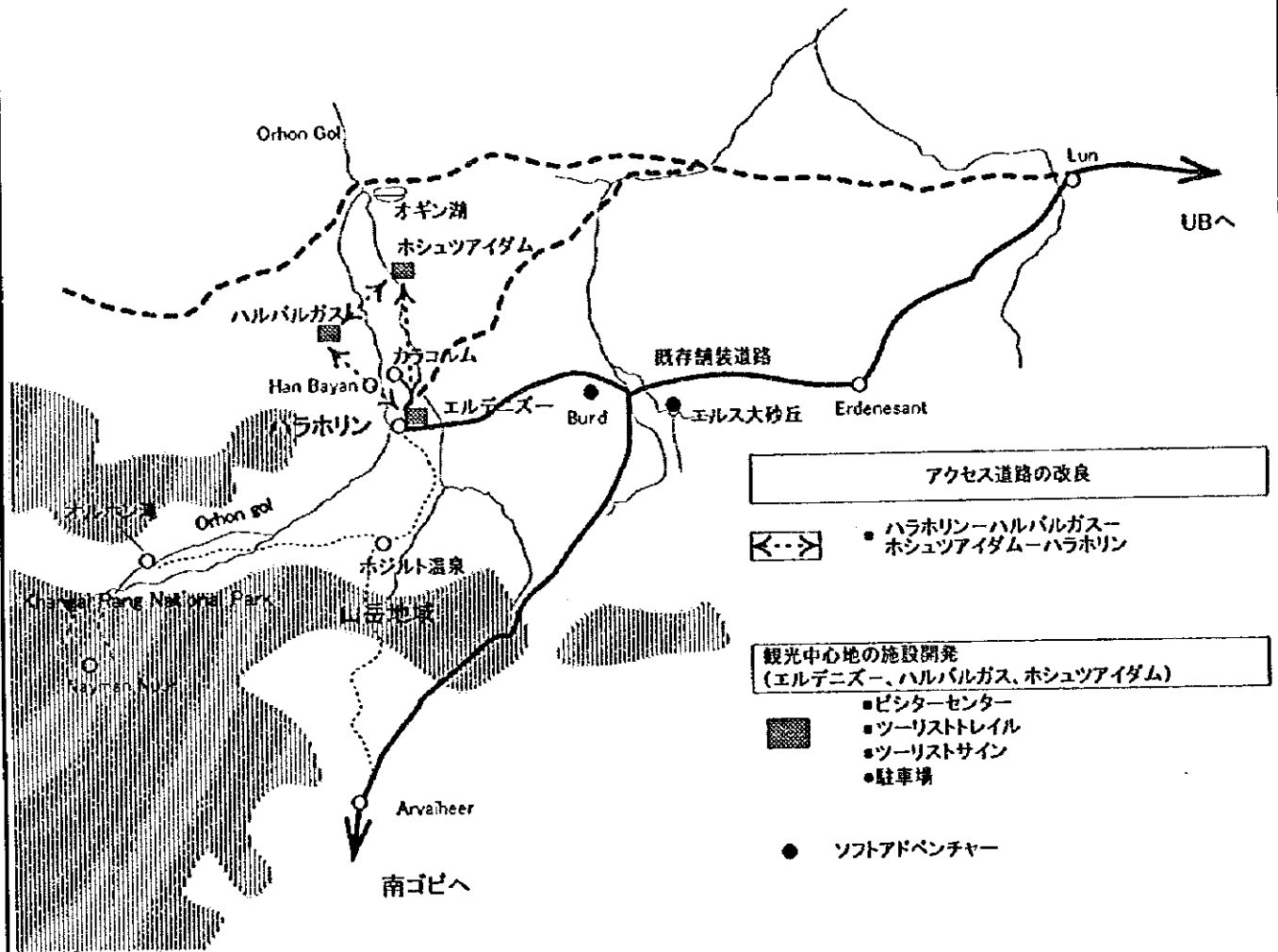
道路交通

- 観光拠点へのアクセス道路の改良：ハラホソ-ハルハルカス-ホジュアイタム-ハラホソ、ハラホソ-ホゾル-オホソ滝間等の道路改良（高品質の砂利道）
- アクセス道路上の道路標識（道路案内、速度制限、動物等の注意）の設置

地方空港の改善

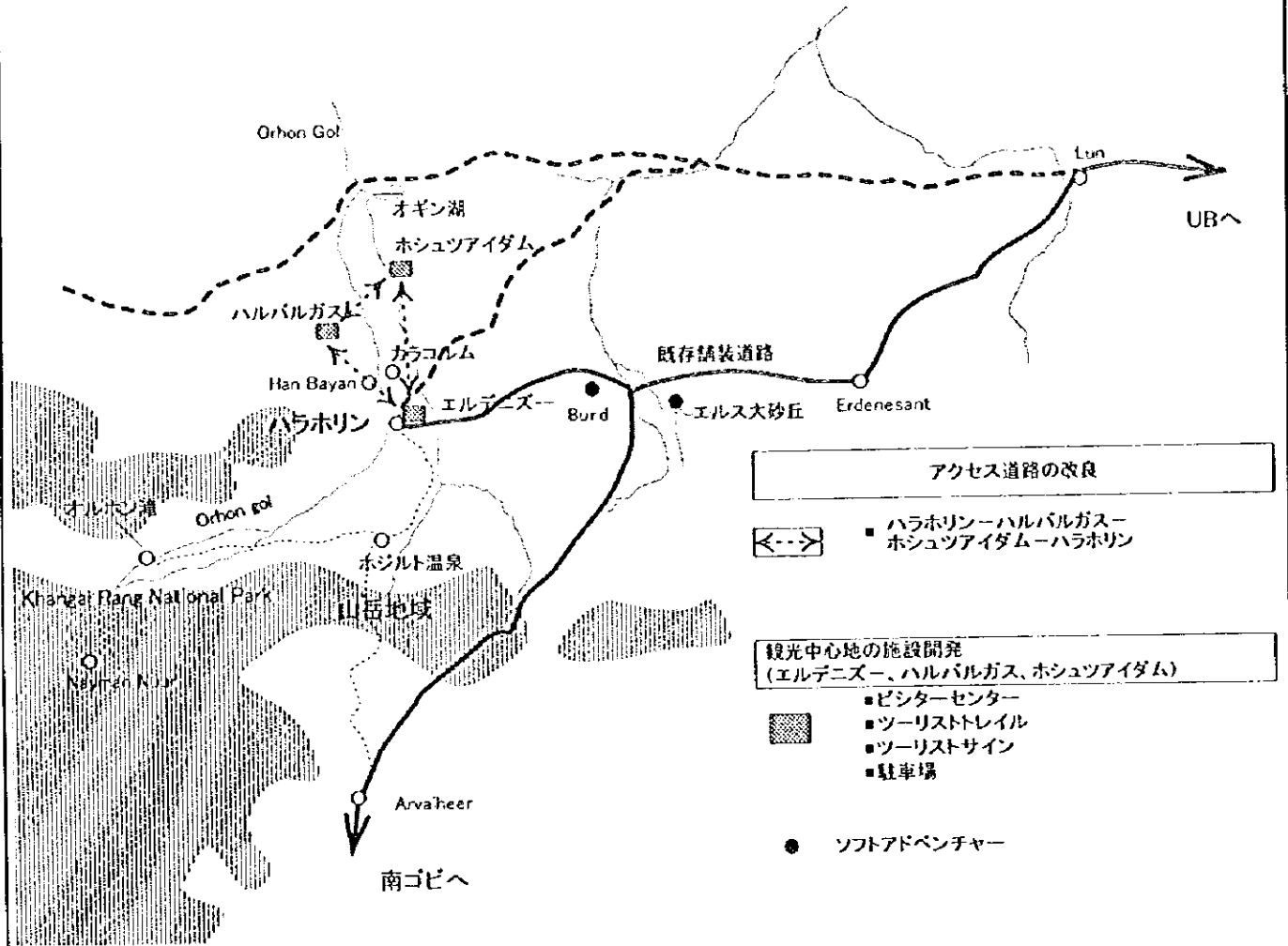
- ハラホソ空港の改善

ハラホリン地域の観光開発コンセプト (2005年)



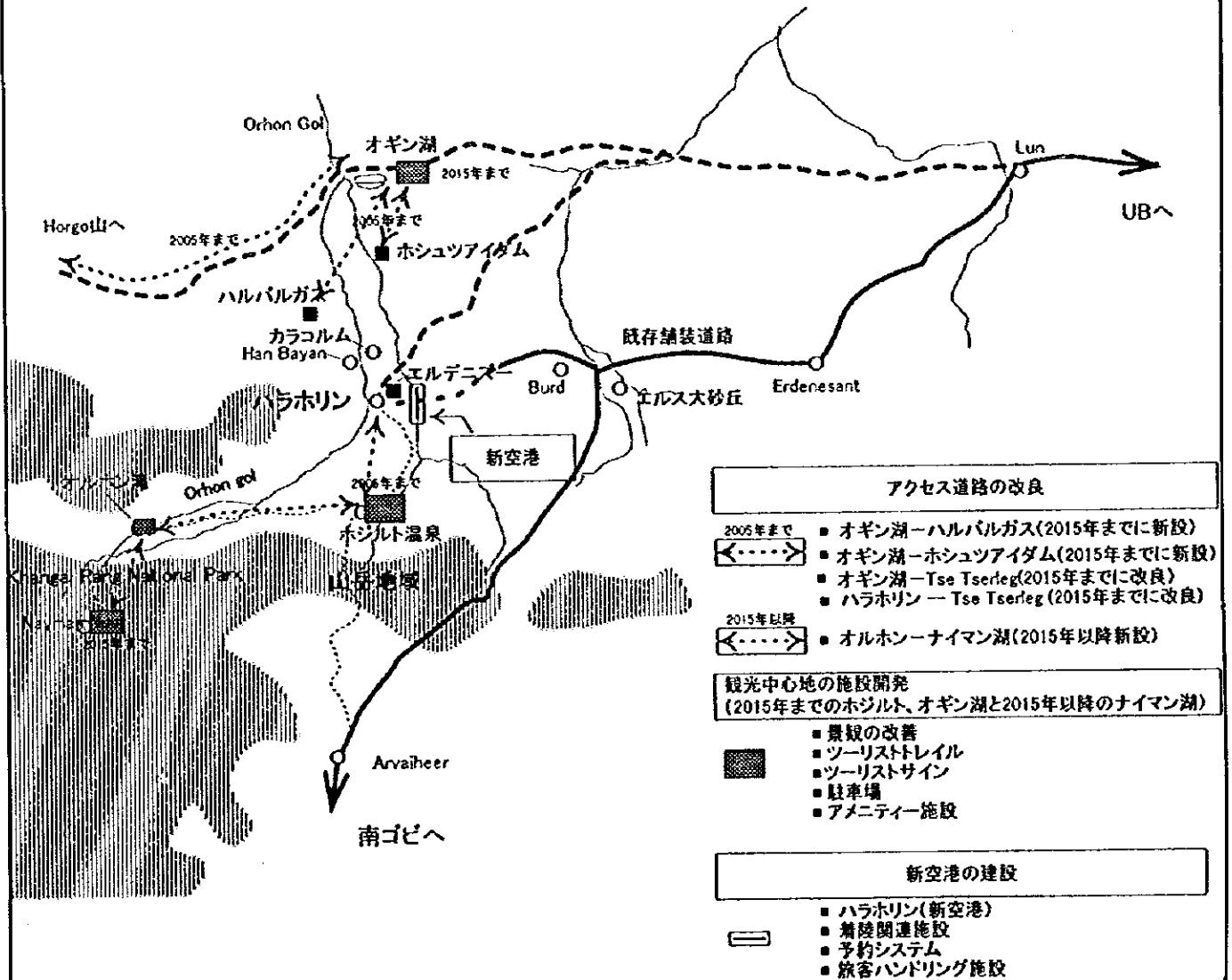
モンゴル国インフラ開発省
国際協力事業団
モンゴル国 観光開発計画調査
図4.3 ハラホリンの 観光開発コンセプト (2005年)
株式会社パデコ/日本工営株式会社

ハラホリン地域の観光開発コンセプト (2005年)



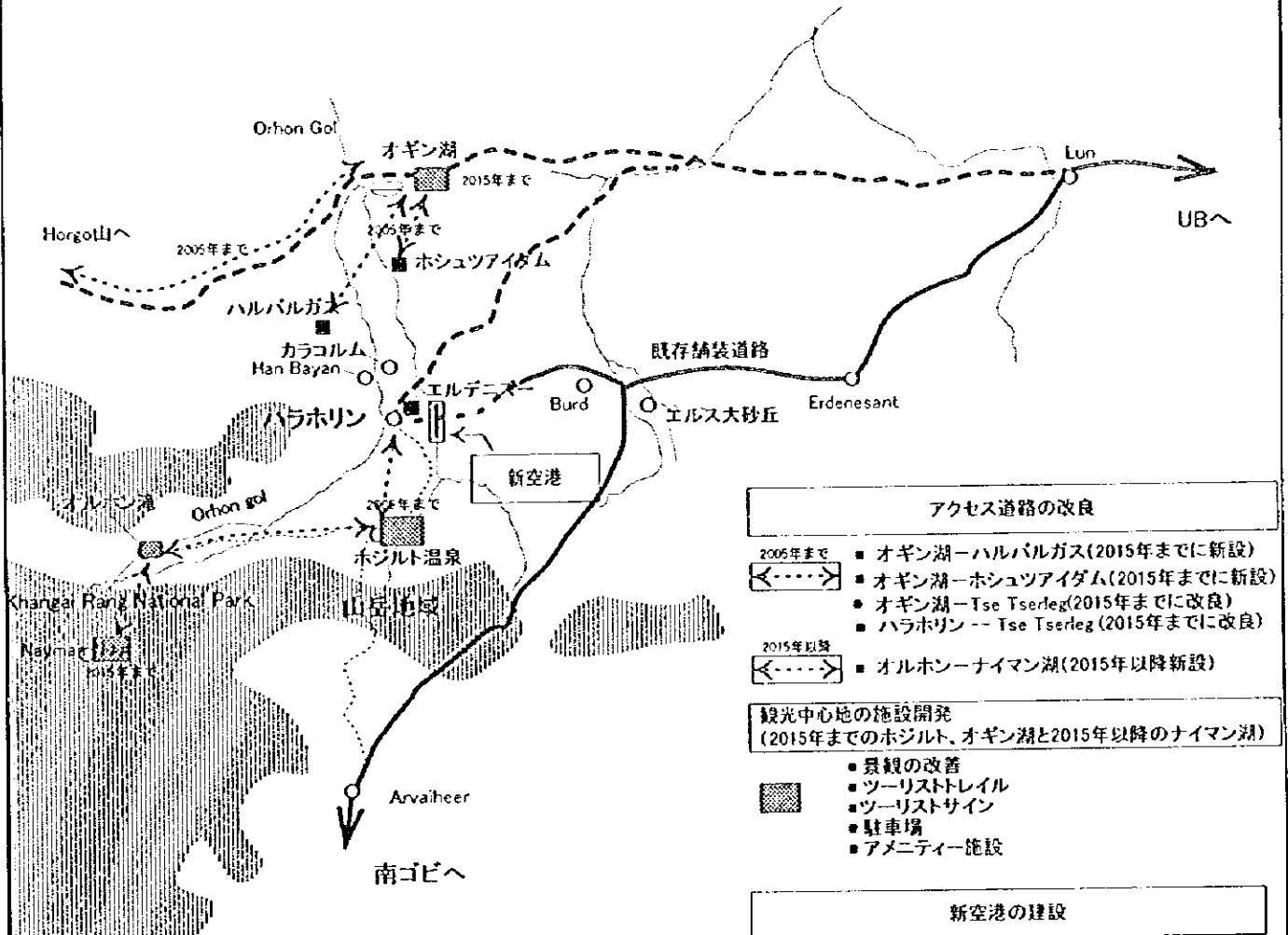
モンゴル国インフラ開発省
国際協力事業団
モンゴル国 観光開発計画調査
図4.3 ハラホリンの 観光開発コンセプト (2005年)
株式会社バデコ/日本工営株式会社

ハラホリン地域の観光開発コンセプト(2015年と以降)



モンゴル国インフラ開発省
国際協力事業団
モンゴル国 観光開発計画調査
図4.4 ハラホリンの 観光開発コンセプト (2015年と以降)
株式会社パデコ/日本工営株式会社

ハラホリン地域の観光開発コンセプト(2015年と以降)



- | アクセス道路の改良 | |
|--|--|
| 2005年まで | <ul style="list-style-type: none"> ■ オイギン湖ーハルバルガス(2015年までに新設) ■ オイギン湖ーホシュツアイダム(2015年までに新設) ● オイギン湖ーTse Tserleg(2015年までに改良) ■ ハラホリンーTse Tserleg(2015年までに改良) |
| 2015年以降 | <ul style="list-style-type: none"> ■ オルホーンーナイマン湖(2015年以降新設) |
| 観光中心地の施設開発
(2015年までのホジルト、オイギン湖と2015年以降のナイマン湖) | |
| ■ | <ul style="list-style-type: none"> ● 景観の改善 ● ツーリストトレイル ● ツーリストサイン ● 駐車場 ● アメニティー施設 |
| 新空港の建設 | |
| ■ | <ul style="list-style-type: none"> ● ハラホリン(新空港) ● 着陸関連施設 ● 予約システム ● 旅客ハンドリング施設 |

モンゴル国インフラ開発省
国際協力事業団
モンゴル国 観光開発計画調査
図4.4 ハラホリンの 観光開発コンセプト (2015年と以降)
株式会社パデコ/日本工営株式会社

4.3 南ゴビの観光開発マスタープラン

1) 観光開発の基本方針

開発コンセプト

- 自然体験型観光の南部地域における拠点として整備
- 一般的な自然体験型観光活動の創出
- SIT 観光に対する観光地の創出（自然体験観光、エコツーリズム、ソト・ハード・アドベンチャー、古生物発掘、洞くつ探検等）

開発戦略

- 主要な観光地（例えば、鷹の谷）における近代的な説明、案内、設備の導入
- 鷹の谷における自然歴史博物館の改良
- 広域自然観光の説明プログラムの整備
- 主要ゲルギャンフ周辺の冒険・活動型観光プログラムの導入
- UB、ハラホフ、南ゴビ周遊観光の拠点機能の整備

2) 観光需要予測

南ゴビの将来の観光需要予測結果は以下の通りである。

	観光計（人・泊）
① 現況(1997年)	43,318
② 2005年	141,000
③ 2015年	396,000

宿泊施設の需給バランス

2005年：ピークシーズン（7月、8月）には現在のゲルギャンフ容量の約2倍のベッドが必要となる。

2015年：7、8月は現在の宿泊容量の約6倍が必要になり、前後の6月、9月にも宿泊施設の満室が予想される。

3) 観光開発計画

図 4.5 及び図 4.6 に、南ゴビ地域における 2005 年、2015 年の観光開発計画を示す。短期的には県都ゲランゴト周辺に既存観光施設の改善が主である。長期的には、Govi Gurvan Saichan National Conservation Park の中央部ツェレ地区と西部ゲランゴト地区の観光地区整備を計画。

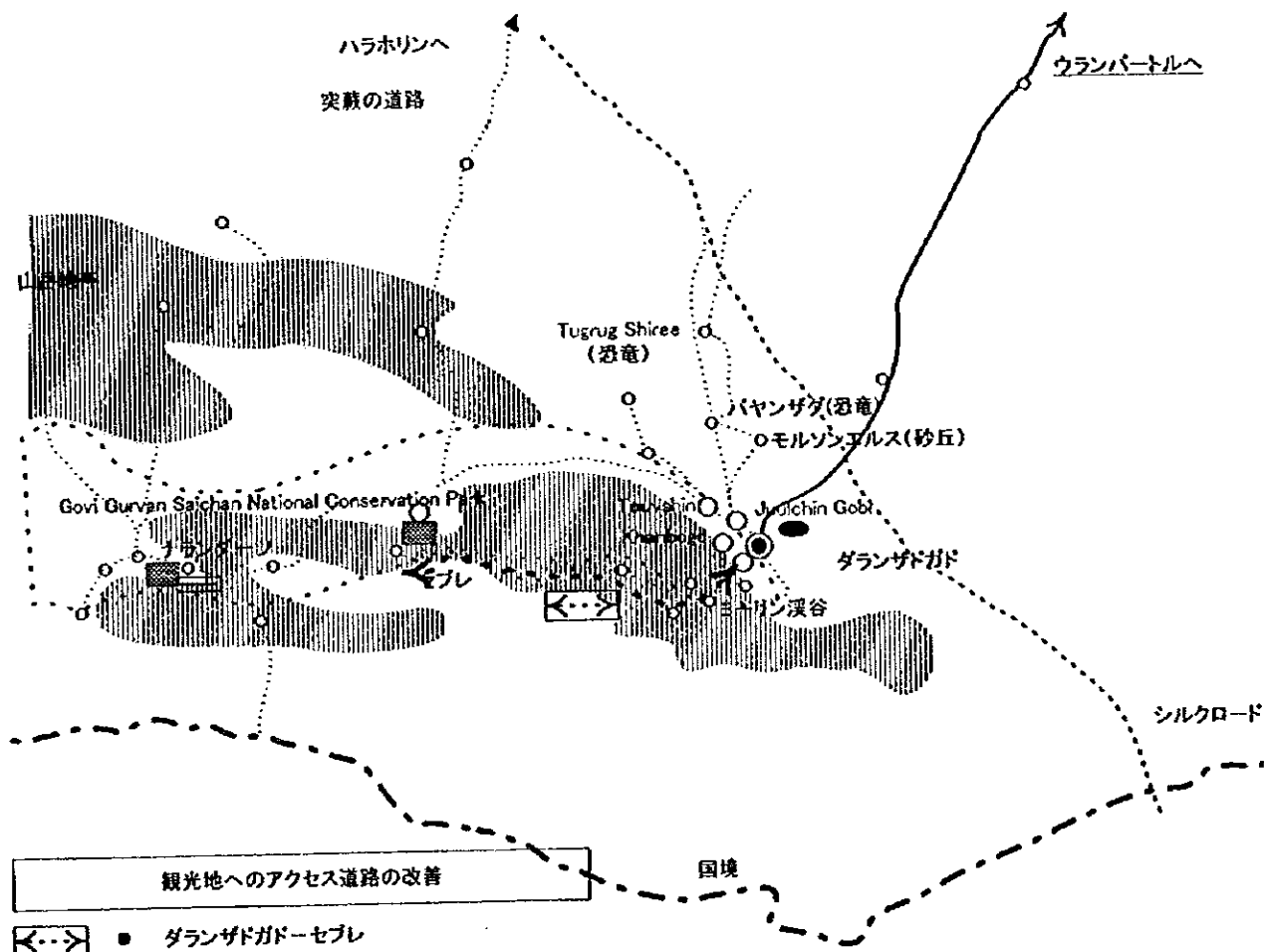
4) 観光施設計画（主要なもの）

自然博物館等

鷹の谷入り口の自然博物館の改善が必要である。

- ビジターセンター（情報センター）の建設
- 上記センターの人材育成
- 建物や周辺の美化

南ゴビ地域の観光開発コンセプト(2015年と以降)



観光地へのアクセス道路の改善

◁...▷ ■ ダランザドガド-セブレ

観光地の施設開発(セブレとナランダーツ)

- ビシターセンター
- ツーリストトレイル
- ツーリストサイン
- 駐車場
- アメニティー施設

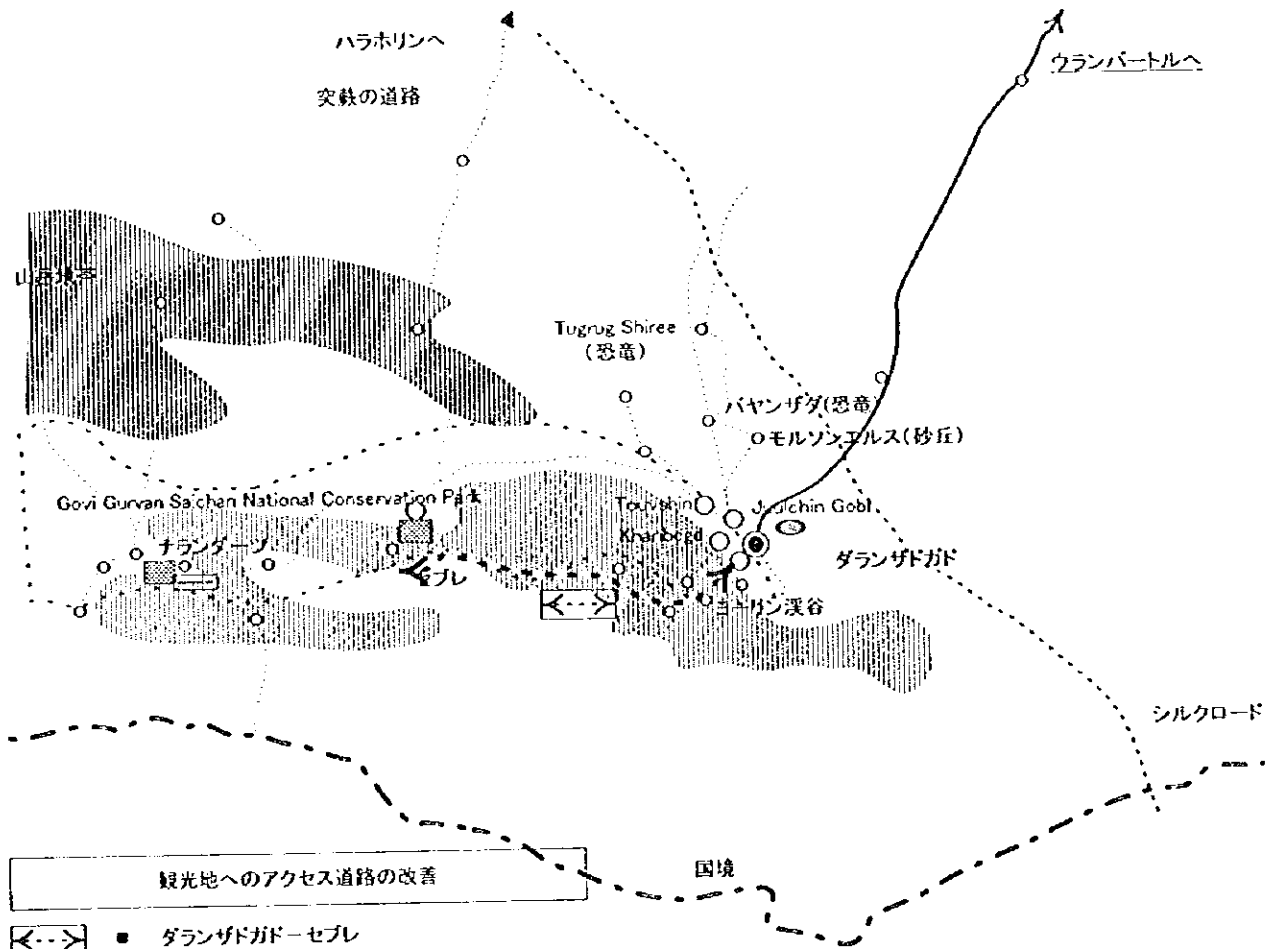
ナランダーツ新空港建設(2015年まで)

- ▬ 新滑走路
- 着陸関連施設
- 予約システム
- 旅客ハンドリング施設

● ダランザドガド・ツーリスト・ベース

モンゴル国インフラ開発省
国際協力事業団
モンゴル国 観光開発計画調査
図4.6 ウムヌゴビの 観光開発コンセプト (2015年と以降)
株式会社バデコ/日本工営株式会社

南ゴビ地域の観光開発コンセプト(2015年と以降)



観光地へのアクセス道路の改善

◁...▷ ■ ダランザドガド-セブレ

観光地の施設開発(セブレとナランダーツ)

- ビンターセンター
- ツーリストトレイル
- ツーリストサイン
- 駐車場
- アメニティー施設

ナランダーツ新空港建設(2015年まで)

- 新滑走路
- 着陸関連施設
- 予約システム
- 旅客ハンドリング施設

☉ ダランザドガド・ツーリスト・ベース

モンゴル国インフラ開発省
国際協力事業団
モンゴル国 観光開発計画調査
図46 ウムヌゴビの 観光開発コンセプト (2015年と以降)
株式会社パデコ/日本工営株式会社

5. 優先プロジェクト・プログラム

5.1 優先プロジェクト・プログラムの選定

全国マスタープラン及びモデル地域マスタープランで提案したプロジェクト・プログラムから（英文本編第17章参照）、以下の方法により、早期に実施すべきプライオリティプロジェクト・プログラムを選定。

（比較評価要素）

緊急性：問題の緊急性

Aスコア：緊急に解決すべき問題あり

Bスコア：条件によっては緊急ではない

必要性：代替策の可能性

Aスコア：代替策が無い

Bスコア：代替策がある

実現可能性：実現可能性の尺度として、開発コストと維持コストの大きさの比較

Aスコア：コストが低く実現性が十分に期待できる

Bスコア：コストが高く実現性にやや疑問がある。

（評価尺度）

AAA 及び AAB の評価を得たプロジェクト・プログラムを、短期（2005年まで）に整備するプライオリティプロジェクト・プログラムとした。それ以外は2005年以降2015年迄に、あるいは2015年以降に整備するものとした。

表5.1に、プライオリティプロジェクト・プログラムを示した。

表 5.1 プライオリティープロジェクト・プログラムの整備計画一覧

プライオリティープロジェクト・プログラム	概要
<p>A プログラム</p> <p>1 政府組織強化プログラム A-1 観光庁の円滑な運営 A-2 インフラ開発省と観光庁(NIC)による観光行政の強化 A-3 地方観光行政の強化</p> <p>2 人的資源開発プログラム A-4 観光人材教育の高度化 A-5 公園管理者等の育成・教育</p> <p>3 制度整備プログラム A-6 観光投資優遇策整備 A-7 観光開発における土地開発規制策 A-8 観光関連免許制度 A-9 安全基準</p> <p>4 各種開発プログラム A-10 モンゴル文化財保全プログラム A-11 ハルホフ遺跡群の説明施設整備プログラム A-12 国際航空フェーズ改善プログラム A-13 国内航空フェーズ改善プログラム A-14 鉄道観光の強化 A-15 遊牧民の観光産業参加支援プログラム A-16 考古学的遺跡及び野生生物の紹介資料 A-17 モンゴルにおけるエコトウリズムの手法紹介プログラム A-18 総合環境管理計画作成プログラム A-19 海外観光市場開拓プログラム A-20 UB市ホテル整備指針 A-21 ゲルギャンの整備指針 A-22 UB市バスネットワークの整備プログラム A-23 共通観光券の整備</p>	<p>インフラ開発省内の観光評議会を有効的に運営。 観光局、観光庁(NIC)の強化 県レベルでの観光担当部門強化</p> <p>観光関連人材育成プログラムとして、ICBの強化 エコトウリズム関連人材の育成、ICBに新設を提案</p> <p>観光産業に関する投資インセンティブの新設 観光産業に関する土地利用、開発規制の法整備提案 観光産業の免許制度整備提案 観光産業(乗馬等)の安全基準整備提案</p> <p>遺跡、寺院等の保存、改善の促進計画 ハルホフの突畝、ウイグール遺跡の観光案内施設整備 国際航空フェーズの改善 国内航空フェーズの改善 鉄道による観光の拡充 遊牧民の観光産業への参加支援方策提案 モンゴルの考古学的遺跡及び野生生物紹介資料 モンゴルにおけるエコトウリズムの方法を紹介する資料整備 総合環境管理計画作成調査実施の提案 海外観光市場開拓プログラムの提案 UBにおけるホテル整備に関するガイドライン作成提案 ゲルギャンの整備に関するガイドライン作成提案 バス路線ネットワークの整備 バス、博物館、土産物などの共通券整備</p>
<p>B 観光関連公共セクタープロジェクト</p> <p>1 文化観光強化プロジェクト B-1 ボリジヤン博物館の改修 B-2 モンゴル文化博物館の建設 B-3 エフネースの改善 B-4 ハルホフビジターセンターの整備</p> <p>2 UBゲートウェイ開発プロジェクト B-5 UB市内観光トイレの整備 B-6 UB市内観光通りの整備 B-7 ハドゥラフセンター整備</p> <p>3 自然型観光強化プロジェクト B-8 フレンドビジターセンター整備 B-9 ゴビビジターセンター整備 B-10 野鳥観察施設整備</p> <p>4 その他のプロジェクト B-11 ハルホフ観光道路の整備 B-12 UB-ハルホフ間国道の交通・観光標識整備 B-13 主要温泉地の施設改善 B-14 民間観光業振興のためのワークショップ</p>	<p>ボリジヤン博物館の改善 モンゴル文化パークの整備 エフネースの改善 ハルホフに観光ビジターセンター(博物館)整備</p> <p>UB観光トイレの整備 UB観光通りの整備 観光通りに、ハドゥラフセンターを整備</p> <p>フレンド自然公園の入口にビジターセンター整備 ゴビ渓谷入口にビジターセンター整備 ガードウイフツァン施設をUB、ハルホフに整備</p> <p>ハルホフと突畝、ウイグール遺跡を結ぶ道路を整備 UB-ハルホフ間道路標識の整備 主要温泉の改善 民間観光事業者に対する融資資金の整備</p>
<p>C 観光関連民間セクタープロジェクト</p> <p>C-1 UB-ハルホフ間国道のレストエリア整備 C-2 ゲルギャンの施設改善 C-3 南ゴビ民間飛行場の施設改善 C-4 スポーツ観光の振興 C-5 乗馬パークの整備</p>	<p>UB-ハルホフ間でのレストエリアの整備 ゲルギャンの施設改善案 南ゴビ民間空港の改善提案 新たなスポーツ活動導入の提案 馬事公園</p>

出所：JICA研究チーム

5.2 優先プロジェクト・プログラムの計画

1) 優先プログラム

政府組織強化プログラム

A.1 観光庁の円滑な運営

観光振興のための関係省庁連絡機関として、インフラ開発省内に設置された（1998年10月のGovernment Resolution No.192）。メンバーは以下の通り。

- 議長：インフラ開発省大臣
- 副議長：自然環境省大臣
- メンバー：インフラ開発省次官、大蔵省局長、文化教育省局長、インフラ開発省局長（道路・交通）、外務省局長、観光協会会長
- 事務局：インフラ開発省観光局

A.2 インフラ開発省と観光庁(NTC)による観光行政の強化

1999年5月、観光振興施策の実施機関であるNTC (Agency) が設置された。これに伴い、観光局 (DOT) は政策計画局に吸収され政策立案機能に特化することになった。

A.3 地方観光行政の強化

地方観光行政組織の強化方策として、アイガウにおけるアイガウ観光庁及び観光部の整備を提案。特にモデル地域であるUB、Ovorhangai、Omnogoviは2005年までに整備する。

人的資源開発プログラム

A.4 観光人材教育の高度化

観光産業に従事する人材の訓練・教育のため、(公的) 既存職業訓練校のICB(Institute of Commerce and Business)を強化する。①レストラン・ホテルマネジメント、②食品・食材加工・管理、③コック・給仕の分野を強化対象とし、a.長期・短期の外国人専門家による訓練・指導、b.モンゴル人教師の海外研修、c.教材、資機材の整備により実施。

ICBは教育文化省の管轄にあるが、社会保健省管轄下の職業訓練校、民間学校も本プログラムに参加可能となる。従って、外国人専門家による訓練・教育を、オープンなものとすることを提案。

A.5 公園管理者等の育成・教育

自然公園レンジャー、監視員に対する継続的でシステム的な教育・訓練は全く成されていない状況である (UNDP のレンジャー訓練マニュアルがあるのみ)。①外国人専門家による訓練プログラム作成、②訓練実施項目に関する外国人専門家との共同研究、③訓練マニュアルの改善、④UBにおける訓練 (上記ICBにおける訓練・教育が考えられる)、⑤On-site Training (ヘルシ、ボグドハーツ、南ゴビ)

制度整備プログラム

A.6 観光投資優遇策整備

観光産業の投資インセンティブを設定することが必要。3スター以上のホテル・ゲルキャンピング (NTCの等級付による)、国際級のレストラン (同前)、冬季観光産業、自然エネルギー活用型のゲルキャンピング、遊牧民の酪農品、国際観光客向け土産品を取り扱うゲルキャンピングなどに、所得税の減免を行う様、投資法の改正を行う。

A.7 観光開発における土地開発規制策

無秩序な観光の土地利用/開発を抑制・防止するため、土地利用ゾーニングの適用、土地開発許可システムの導入、オープンな土地賃貸制度の整備、土地開発がトライインの整備を提案。

A.8 観光関連免許制度

観光産業の免許制度整備提案。日本の事例を参考に、乗馬インストラクター、熱気球等インストラクター、ツアーガイド、通訳等のライセンスを設定。

A.9 安全基準

観光産業における安全基準として、連盟による安全基準の制定と運用。特にスポーツ観光における防護用具装着の義務化、緊急時のための病院、護送手段に関する情報整備を強調。既に日本の防火基準、安全規準がモンゴルに紹介されているが、有効に機能していない。避難情報の整備、防火責任者の設置、防火施設の性能保証制度の導入。

各種開発プログラム

A.10 モンゴル文化財保全プログラム

モンゴルの遺跡、寺院等は苛烈な自然、火災等により損傷を受けている。又、過去の不適切な発掘、調査、修復作業、あるいは遊牧民等による不適切な移動による、損傷も見られる。

物理的な損傷防止工（防火、侵入防止等）、遊牧民教育、適切な観光装置（観光ルート、説明板、注意書等）の整備、博物館へ収容等（ダメージの激しいもの）の対策。緊急案件として、①Shank 寺（ハラホフ南20km）、②Zaya 寺（アムンガイ県 Bulgan 山）の修復。

A.11 ハラホフ遺跡群の説明施設整備プログラム

突厥遺跡及びウイグル城塞跡の観光説明施設整備を提案。突厥については、トルコ政府により遺跡が点在する地区の遺跡公園化プロジェクトが1997年～2001年に実施されている。

ウイグル城塞跡については現在のところ何らの計画も無いことから、説明板、アプローチ歩道、展望広場、駐車場等を整備。

A.12 国際航空サービス改善プログラム

MIAT の国際航空サービスについて、①航空料金等の低減による妥当な観光料金の実現、②外国航空会社との提携、③地上サービス、機内サービス等の改善、による国際競争力の育成。

A.13 国内航空サービス改善プログラム

国内航空事業について、①安全性を担保しつつ完全民営化を実施（2005年迄に）、②サービスの改善（予約システム・チェックインシステム改善、定時制確保）、③整備水準向上・新規航空機材導入による安全性確保。

A.14 鉄道観光の強化

中国国境に近い南ゴビ（Zamunn Uud）は列車による観光開発地域としての開発ポテンシャルが高い。旅行時間の短縮、寝台コンパートメントにおけるサービス改善、車両の改善、更に Ulaan Uul 駅にゲルキャンプの新設。

A.15 遊牧民の観光産業参加支援プログラム

観光産業の振興は遊牧民の生活向上に寄与することが前提であり、その為には観光収入が遊牧民に直接届く仕掛けが必要である。

- 遊牧民が乳製品等をゲルキャンプへ納入するに当たり障害となっているのは衛生上の問題であり、ゲルキャンプに低温殺菌施設を設置。さらに、社会主義時代のミルク集荷システムが崩壊しているため、新たな民間集荷会社の強化。
- 遊牧民による観光土産の製造については、デザイン、販売手段、集荷、原材料の支給などのシステムについて調査。ゲルキャンプが集荷、販売を行うについての政策的な誘導手法、ハートクラフトセンターによるデザインの研究、指導などが検討課題。
- フェルト織りの実演など遊牧民の伝統生活文化を観光客に紹介する。観光アトラクションの開発について、詳細な調査を行う。モンゴル文化パークやハートクラフトセンターにおける実演と観光客の参加を実現する。

A.16 考古学的遺跡及び野生生物の紹介資料

GIS やマッピングを利用して、モンゴルの考古学的遺跡及び野生生物の図解的なチェックリスト及び地図を作成し、考古学的遺跡、野生生物の研究及び保護を通じて観光発展に役立てる。

A.17 モンゴルにおけるエコツーリズムの手法紹介プログラム

モンゴルにおけるエコツーリズムのガイドライン、安全基準、モンゴルのエコツーリズムの特性紹介、エコツーの紹介、エコツー業者の紹介などに関する情報を整備。

A.18 総合環境管理計画作成プログラム

社会・文化及び自然環境に関する調査を実施し、総合的環境管理プログラムを作成する。
①野生生物の保護と利用に関する調査、②遊牧民の土地利用に関する調査、③野生生物の狩猟地域の再構築に関する調査。

A.19 海外観光市場開拓プログラム

観光フェアへの参加、外国メディア、観光産業関係者との対話、観光局後援ツアーの実施、モンゴル観光年 2005 の開催、海外観光プロモーション用資料整備、閑散期における観光振興の為の観光祭・イベントの開催などを 2005 年迄に実施する事を提案。

A.20 UB 市ホテル整備指針

UB 市における宿泊容量（外国人用で現在約 2,600 ベッド）を、2005 年迄に 40%～100% 増加。

A.21 ゲルキャンプ整備指針

UB 郊外部：2005 年迄は現在のゲルキャンプの施設量で十分であり、これ以上の建設はオーバーキャパシティとなる。

ハルホフ：2005 年に 70～170 ベッド（1ゲルキャンプ）が新たに必要。

南ゴビ：2005年に300～400ヘクタール（2ゲルキャンブ）が新たに必要となる見通し。整備指針は、上記の施設量の見通しと共に、ゲルキャンブ、安全規準、ライセンス、土地開発許可システムなどを合わせた、ゲルキャンブ開発のためのガイドライン。

A.22 UB市バスストップの整備プログラム

UB市内の主要公共交通機関であるバス交通について、バス運行案内地図、停留所（276箇所）の案内版を整備する。UB市交通局が本計画に従って実施。

A.23 共通観光券の整備

バス、博物館、館内土産店、レストランなどの共通利用券の整備。

2) 観光関連公共施設プロジェクト

文化観光強化プロジェクト

B.1 ボクトハン博物館の改修

- 冬の宮殿の再建（外装、デザインは元の形を維持したまま、内部の部屋割り、建物基礎、壁、木組み等を全て再構築する。保安、防災施設も完備する。）
- 外周柵と門の改修（延長500m）
- 寺院を取り巻く土塀の修理（延長250m）
- 木材、倉庫、サービス棟の新設（620m²）
- 通路、広場の舗装改修
- 寺院建物の改修（屋根修理、壁等再塗装、床修理等）
- グッズ売場、案内版の設置

B.2 モンゴル文化博物館の建設

- UBの西35kmの草原を選定。遊牧民の夏営地の多い場所を選定（遊牧民の参加を期待できる）。
- 7民族を紹介する7つの大規模ゲルを中心に、遊牧生活の道具、楽器、馬と遊牧民との関係等を紹介・展示する。
- 展示施設の周辺1.5km～3kmの場所に、遊牧民の生活を観光客が体験できる様、遊牧民を居住させる（夏季）。

B.3 エルテネーの改善

エルテネー内の遊歩道、説明版、ベンチ等休憩施設整備、及び修景。また、管理棟、売店等の改修。寺院の部分的改修。

B.4 ハラホソビジターセンターの整備

エルテネーの入口（約100m距離をおいて）に、床面積約3,000m²の博物館兼ビジターセンターを整備。

モンゴルの中原であるハラホソの石器時代からフン時代、突厥、ウイグル、モンゴル帝国、エルテネーの建設までを全て展示。

B.5 UB市内観光トイレの整備

UB市内の観光施設を繋ぐ、観光トイレを整備する。起点であるスポーツ広場にインフォメーション

センターを設置、要所に案内版を整備し、舗装の改修も行う。なお、TACIS がトレイルのルート地図を作成。

B.6 UB 市内観光通りの整備

観光客が集まる観光街を整備。市が計画中の商業通り 2005 の中に、観光遊歩道（延長 120m）及び観光プラザを整備。観光プラザの中にはおみやげ・手工芸品センター、レストラン、店舗、野外劇場等を導入。

B.7 ハンドクラフトセンター整備

おみやげ・手工芸品センターを観光通りの中心に整備し、民芸品のワークショップ、即売所、デザインセンター等を設ける。床面積は約 960m²を想定。

自然型観光強化プロジェクト

B.8 ツェルジビジターセンター整備

ツェルジ自然公園の入り口に、観光客への案内、教育・啓蒙のためのビジターセンターを整備。床面積は約 130m²で周辺景観にマッチしたデザイン。

B.9 ゴビビジターセンター整備

Yolyn Amm 溪谷の入口に、Govi Gurvan Shaichan 自然公園の紹介と公園レジャー教育の拠点を整備。GTZ との協議をふまえてデザインしたもので、ビジターセンターから Yolyn Amm 溪谷までは馬や牛車により移動するシステムなど自然環境に配慮したデザイン。

B.10 野鳥観察施設整備

UB 市郊外及びハラホソ（キール湖）に野鳥（特に、渡り鳥）の観測施設整備を提案。モンゴルの渡り鳥は、種、量の豊富なことがエコ туриスト（特に欧米の観光客）に知られており、観光資源として開発。

その他のプロジェクト

B.11 ハラホソ観光道路の整備

現在、エレンヌー〜突厥遺跡、ウイグル城塞を結ぶ道路は草原の轍であり、自然環境の保全のため砂利舗装の道路を整備。整備距離は 47km 及び 30km。

B.12 UB-ハラホソ間国道の交通・観光標識整備

UB〜ハラホソ間に道路・観光標識を整備。方向案内版、距離案内、地名案内、安全に関する標識（速度制限、危険予防等）等を整備。

B.13 主要温泉地の施設改善

主要温泉地（UB、ボジルト、シャルガルツェルト）の施設改善により、国内向け観光地をグレードアップ。

B.14 民間観光業振興のためのツアーパッケージ

ゲルキャンプ、沿道レストランなどの建設・改築に要する建設資金を融資するための外国資金援助システム導入。

3) 観光関連民間セクタープロジェクト

C.1 UB-ハラホリン間国道のレストエリア整備

UB～ハラホリン間に、トイレ、食堂、ガソリンスタンド等を含む休憩所の設置を促進する。整備主体は民間。

C.2 ゲルキャンプの施設改善

自然エネルギー（太陽光発電等）を活用した給電施設、衛星通信施設、汚水浄化施設、廃棄物処理施設を完備したゲルキャンプ。

C.3 南ゴビ民間飛行場の施設改善

ゲルキャンプ 付属の民間飛行場について、滑走路舗装、通信・誘導施設改善等。

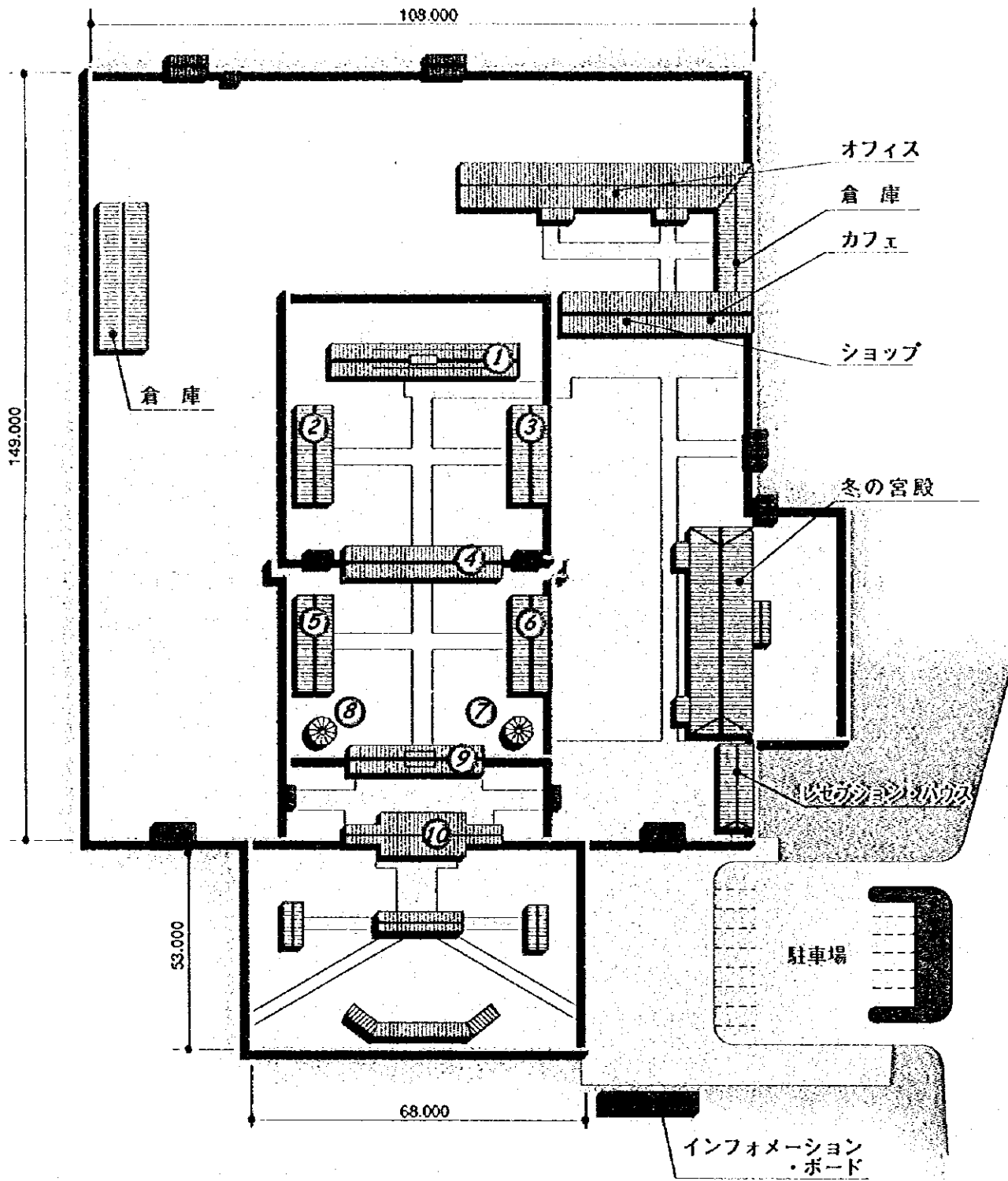
C.4 スポーツ観光の振興

安全性確保のための対策も合わせ、乗馬、ジープツアー、熱気球、スカイヘリコプター、パラソング・パラグライダー、ボート、カヌー、キャンプ、マウンテンバイク、スキー等スポーツ観光活動メニューを増やし、モンゴル観光の魅力を增强。

C.5 乗馬パークの整備

UB 市郊外において、乗馬パークを開発し、乗馬トレーニング、競馬レース、馬に関する歴史・文化・科学博物館、キャンプ場等を建設。

ボグドハーン宮殿博物館

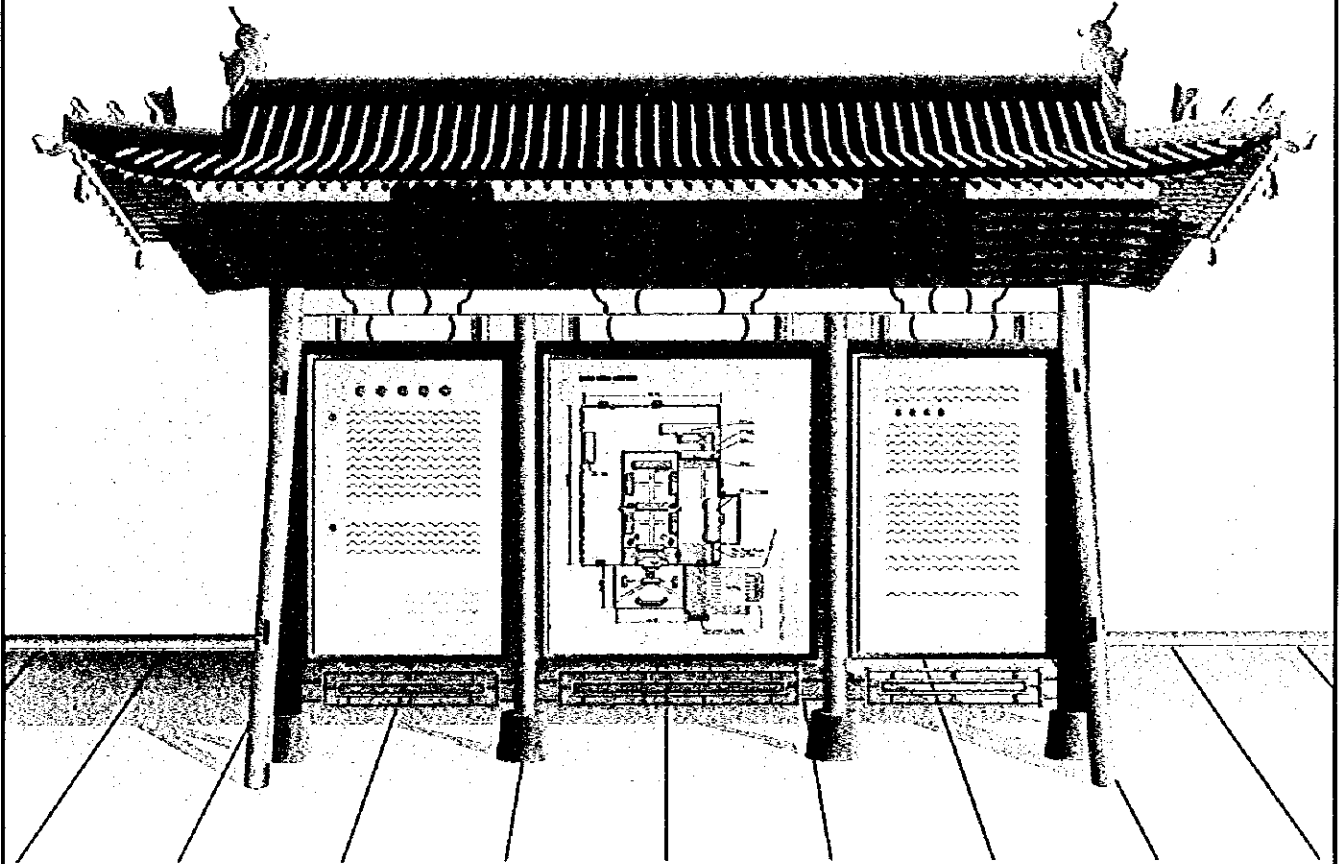


- 1 Lavrin Temple
 - 2 Temple of Many Gods
 - 3 Labrary Temple
 - 4 Naldan Temple
 - 5 The Temple Paintings
 - 6 The Temple Appliques
 - 7 Jin Bell Tower
 - 8 Jin Drum Tower
 - 9 Mahrajs Temple
 - 10 An Din Men Gate
- 新設歩道
 歩道
 フェンス

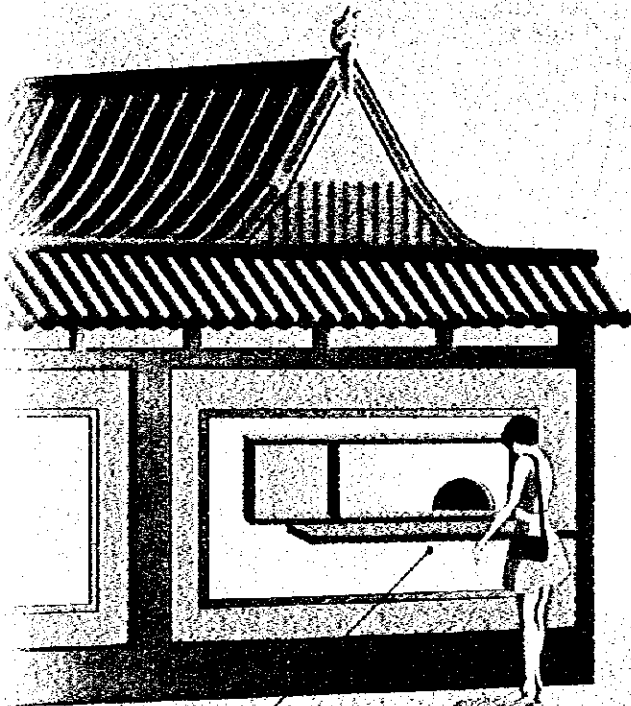
モンゴル国インフラ開発省 国際協力事業団
モンゴル国 観光開発計画調査
図5.1 ボグドハーン宮殿博物館 改善計画 株式会社バデコ/日本工営株式会社

ボグドハーン宮殿博物館

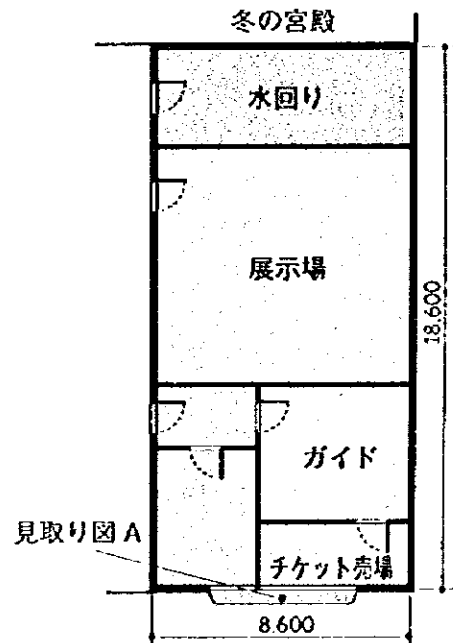
○ インフォメーション・ボード ○



○ レセプション・ハウス ○



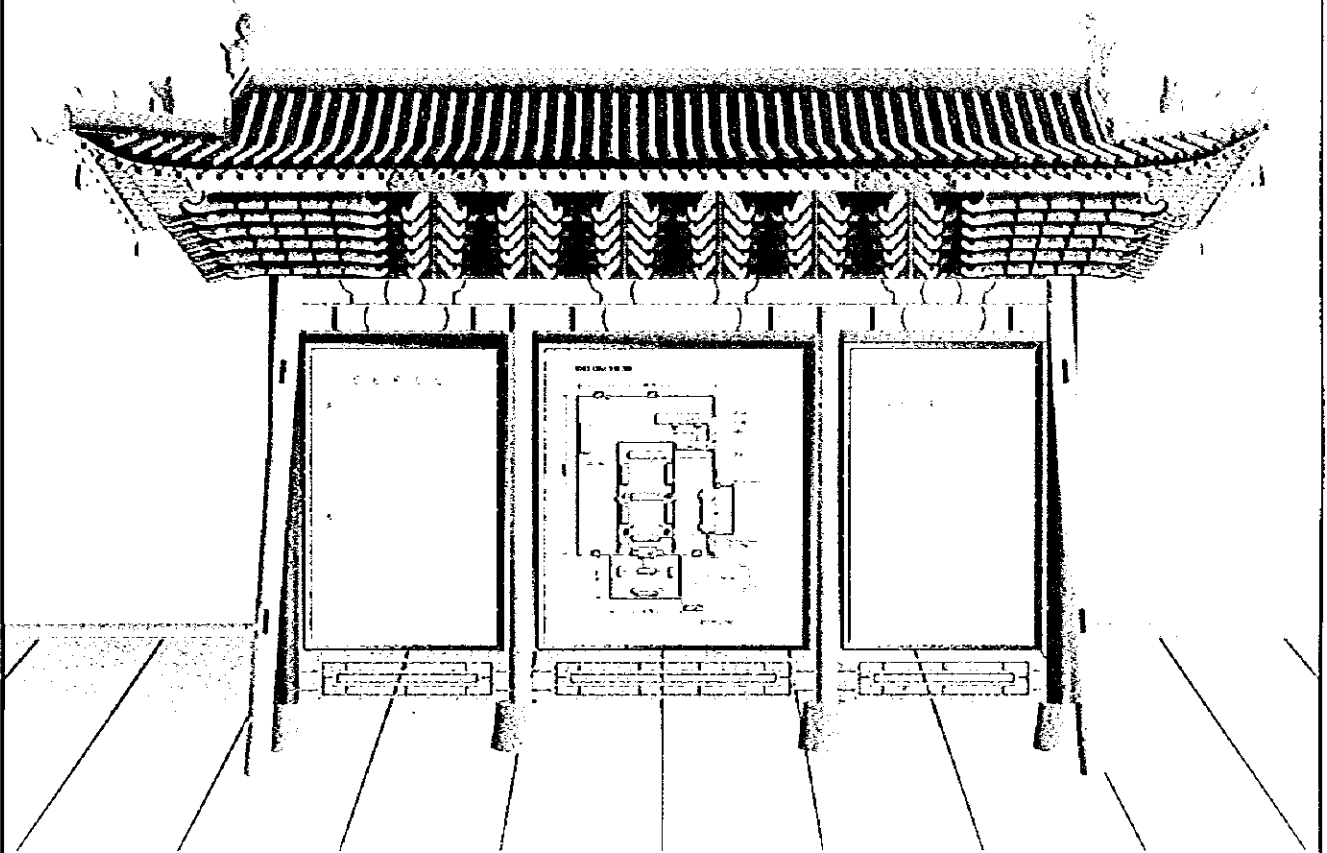
見取り図 A



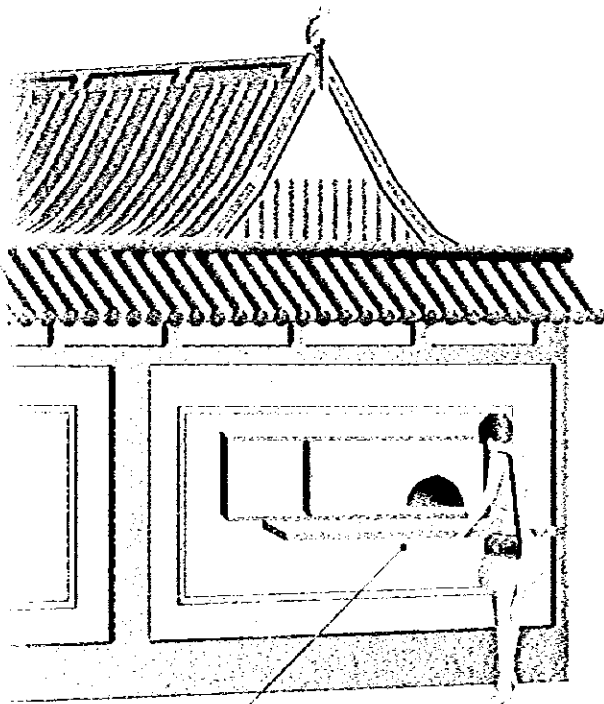
モンゴル国インフラ開発省
国際協力事業団
モンゴル国
観光開発計画調査
図5.2
インフォメーション・ボード とチケット売り場の改良
株式会社パデコ/日本工営株式会社

ボグドハーン宮殿博物館

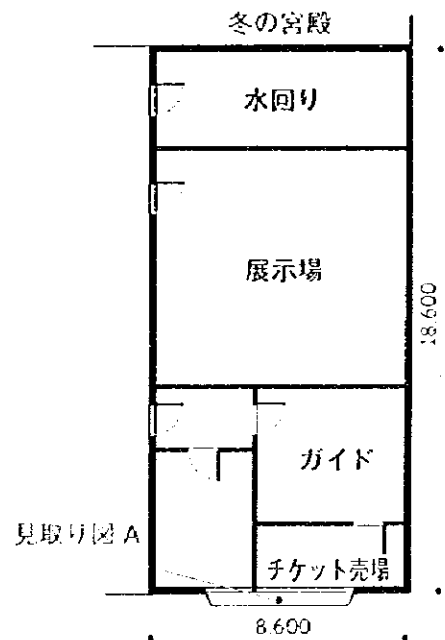
○ インフォメーション・ボード ○



○ レセプション・ハウス ○



見取り図 A



モンゴル国インフラ開発省
国際協力事業団
モンゴル国
観光開発計画調査
145.2
インフォメーション・ボード とチケット売場の改良
株式会社パデコ/日本工営株式会社

モンゴルカルチャーパーク

